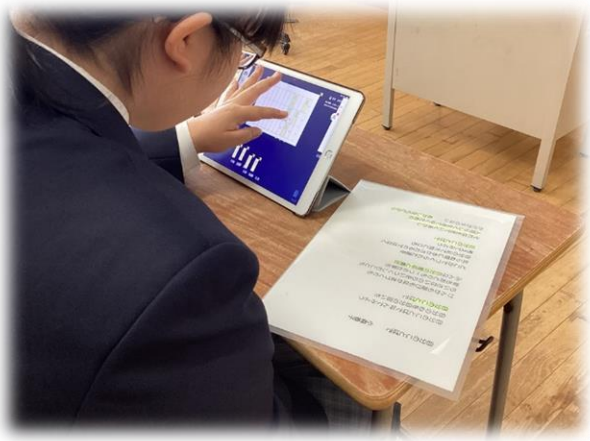
自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり

～国語科の授業設計と授業実践を通して～

令和6年度　研究紀要　第45集

小学部3年生　国語科2グループ
「すきなもの　なあに」

中学部1年生　国語科2グループ
「いろいろなお話をよんでみよう・たのしもう
～『のりもの』をくわしくせつめいしよう!～」



高等部2年生　国語科2グループ
「群読しよう」

秋田県立横手支援学校

目 次

はじめに　校長　清水　　潤

第一部　全体研究　１

第二部　各学部の実践

Ⅰ　小学部の実践　１０

Ⅱ　中学部の実践　２０

Ⅲ　高等部の実践　３１

あとがき　教頭　髙橋　和恵

研究に携わった職員

はじめに
～研究１年目を終えるに当たって～

校長　清水　潤

研究主題「自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～国語科の授業設計と授業実践を通して～」１年目を終えるに当たり、本研究の根幹と考える次の３点をおさえておきたい。

１　児童生徒の実態を生活全体から捉えること

今年度は国語科を研究対象としたが、キーワード「伝え合う姿」は、国語科以外の学習や生活の場面でもたくさん見られた。言語能力は、教科等横断的な視点に立った資質・能力であり、国語科を要としながら、教育課程全体を見渡して計画的に取り組む必要がある。伝え合う姿が、学校はもちろんのこと、家庭や地域でも一層見られるようにするためにも、まずは児童生徒の実態を生活全体から捉える必要がある。

２　自分の思いや考えを伝えるに至る過程を丁寧に捉えること

思いや考えを伝える力は、育成を目指す資質・能力の三つの柱のうち「思考力、判断力、表現力等」の表現力に当たるが、自分の意思を伝える力は、一般的に知的障害のある方々の課題と言われる。よって、「思考→判断→表現」の過程、思考の前段階としての「気づき」や「思考の芽生え」、育成を目指す資質・能力の他の柱「知識、技能」「学びに向かう力、人間性等」との関連など、思いや考えを伝えるに至る過程を丁寧に捉える必要がある。

３　安心して伝え合える環境をつくること

私たち大人であっても、状況によっては自分の思いや考えを伝えることに迷いや不安があり、勇気のいる場合もある。知的障害のある児童生徒にとっては、なおさらではないだろうか。自分の思いや考えを伝え合うことを積み重ね、自信をもてるようにするためにも、安心して伝え合える環境づくりが必要である。お互いを尊重し合い、肯定的に受け止め合い、建設的な質問や意見を述べ合うことなど考えられるが、一番の環境は私たち教師である。

以上３点を念頭に置きながら、児童生徒が自分の思いや考えを相手に伝えたくなるような授業づくり、相手に伝わったという実感をもち、伝え合うことの喜びを感じられるような授業づくりをしたいものである。

今年度の授業研究会は、本校職員のみで行ったが、来年度は他校からも参加を募り、率直な御意見や御感想をいただきたいと考えている。また、本紀要を御覧いただいた皆様には、御意見や御感想をお寄せいただければ幸いである。

〈第一部〉

全体研究

令和６年度　研究主題

自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり
～国語科の授業設計と授業実践を通して～
（１年次/２年計画）

１　研究主題の設定理由

（１）児童生徒の実態と学部経営の努力事項

本校には、友達や教師との関わりや対話を楽しむ児童生徒がいる一方、自信のなさから自分の思いや考えを具体的に伝えることに課題のある児童生徒もいる。このことから、各学部経営の努力事項として、小学部は国語や読書活動などを通して学習の基盤となる言語活動を行うこと、中学部は本への興味・関心を高め、言語活動の充実につながるようにすること、高等部はコミュニケーション能力の向上を図ることを挙げている。

（２）本校の特色ある教育活動

本校では、地域資源を活用した「横手が舞台」の学習に取り組んでいる。この取組で育てたい力の一つに「(地域について）発信する」があり、目指す児童生徒の姿を段階的に示している。(図１）また、今年度の読書活動推進計画には、目指す姿として「読書活動から感じたことや思ったことを伝える姿」「日常生活の中で自ら考えたり判断したりして、言葉で表現する姿」を示している。

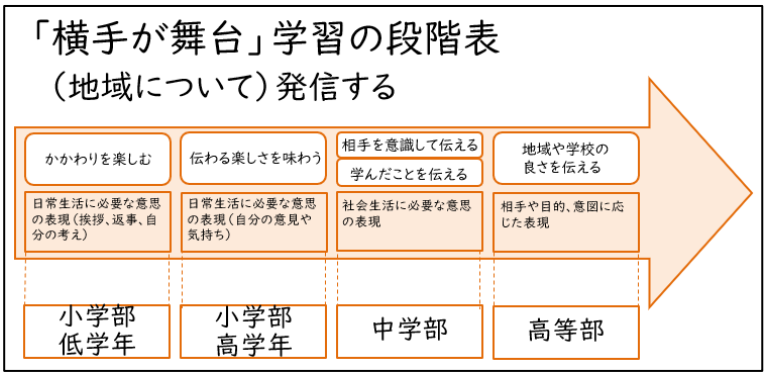


図１「横手が舞台」学習の段階表「(地域について)発信する」

以上の（１）と（２）を踏まえて、本研究の授業づくりで目指す姿を「自分の思いや考えを伝え合う」とした。なお、自分の思いや考えを伝え合う姿は言語能力を発揮した姿であることから、言語環境を整え、言語活動や読書活動の充実を図ることが大切になる。研究１年目は言語能力の育成の要である国語科を研究対象の指導の形態として取り上げ、２年目は１年目の成果と課題を踏まえて検討する。

（３）授業づくりに係る取組と課題

本校では授業づくりの基礎・基本として平成28年度に「横手のスタンダード」を作成し、現在も活用している。ここでは、単元スパンで授業設計、授業実践、授業評価することを基本とし、チームで授業づくりをする大切さをまとめている。これまでの研究では、実態把握や単元の設定、授業の構成が課題となっていることから、授業設計を重視し、授業実践を行うことにする。

2　本研究における「自分の思いや考えを伝え合う姿」の捉え

日常生活や社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えをもち、相手に分かるように身振りなどで伝えたり、相手の話を聞いて理解したりする姿。（図２）

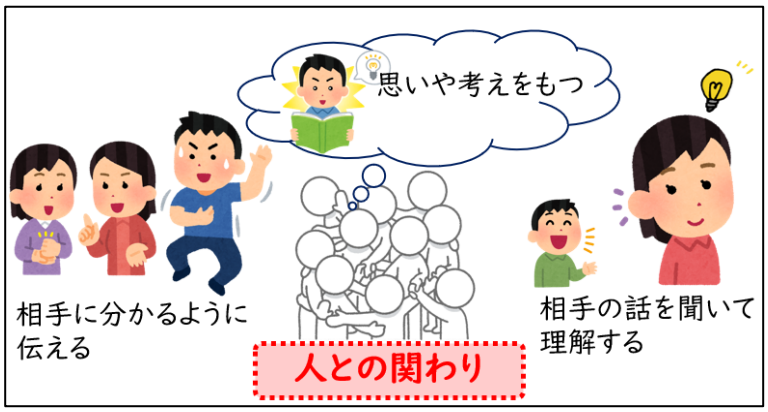
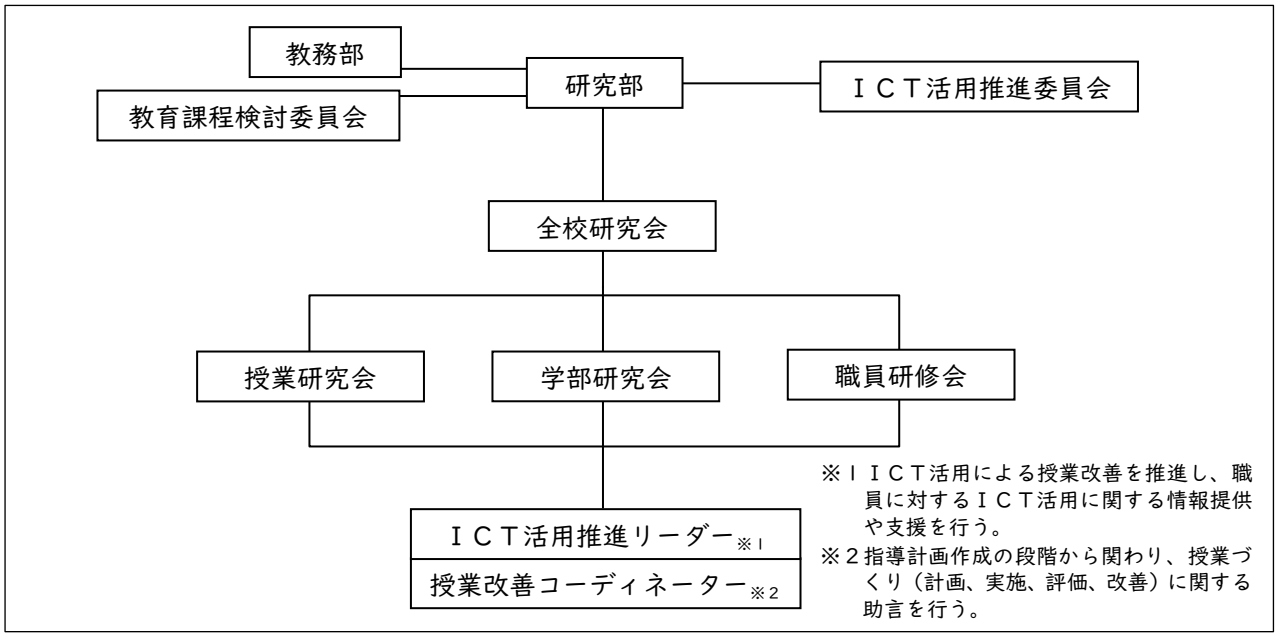


図２「自分の思いや考えを伝え合う姿」の捉え

3　研究組織



4　研究の内容と方法

（１）各学部段階で目指す「伝え合う姿」の具体化と共通理解

ア　学部研究会でのワークショップ

イ　具体化した「伝え合う姿」の定期的な評価と取組の全校共有

（２）児童生徒の言語能力の育成

ア　各学部に応じた「聞く・話す」のポイントの整理と共通理解、実践

（３）「横手のスタンダード」を活用した国語科の授業づくり

ア　授業改善コーディネーター、ICT活用推進リーダー等多角的な視点で行う単元検討会（授業設計）

イ　学部授業研究会、全校授業研究会の実施

（４）国語科の授業改善と言語環境の整備に向けた職員研修の充実

ア　全校研修会の実施と他校種授業参観、他校授業研究会等への参加・報告

イ　【言語環境】に関するアンケートの実施（職員対象）

5　研究計画

下記のように研究を進める。（表１）

表１　令和６年度　研究計画

実施時期	研究会等	内　容
４月	全校研修会①	・「横手のスタンダード」の確認
５月	全校研究会①	・全教職員での研究主題、方向性の確認
	学部研究会①	・各学部における「目指す姿」の協議 ・研究主題を基にした学部における方向性の確認 ・全校授業研究会、学部授業研究会の授業者選定
６月	指導主事計画訪問	・研究対象授業の略案作成、授業提示
８月	単元検討会 ※各学年、学習グループで実施	・単元構成や授業内容の協議 ・ＩＣＴ活用の助言（ＩＣＴ活用推進リーダー）
	学部研究会②	・各学部における進捗状況の確認 ・各学部で身に付けておきたい「聞く・話す」姿の整理
	全校研究会②	・各学部の取組の共通理解と今後の取組の確認
	全校研修会②	・国語科の授業づくりについて 「知的障害教育における国語科の授業づくり ～学習指導要領及び本校の研究を踏まえて～」 講師　校長　清水　潤
９月	学部授業研究会①	・小学部６年生　授業提示、授業研究会の実施 ・中学部３年生　授業提示、授業研究会の実施
	学部授業研究会	・高等部国語科全学習グループ　授業提示 （９／２～10/７）
	【言語環境】に関するアンケート	・日々の取組についての振り返り
	研究部報№１の発行	・第２回全校研究会の共有、今後の取組の周知
10月	学部授業研究会②	・小学部１年生１グループ 授業提示、授業研究会の実施 ・中学部２年生１グループ　授業提示、授業研究会の実施
	学部授業研究会	・高等部　授業研究会の実施
11月	学部研究会③	・全校授業研究会提示授業の指導案検討、参観体制等の確認
	研究部報№２の発行	・【言語環境】に関するアンケートの結果と板書の紹介

12月	全校授業研究会	・学部縦割りによる授業参観、授業研究会の実施 小学部３年生２グループ　授業提示 中学部１年生２グループ　授業提示 高等部２年生２グループ　授業提示
１月	学部研究会④	・学部研究のまとめ、成果と課題の整理
２月	研究部報№３の発行	・全校授業研究会全体会　校長あいさつの紹介
	研究部報№４の発行	・全校授業研究会　中学部提示授業、授業研究会の紹介
	全校研究会③	・今年度の研究の取組と成果・課題の共通理解 ・次年度の研究についての提案
	研究部報№５の発行	・全校授業研究会　小学部提示授業、授業研究会の紹介
	研究部報№６の発行	・全校授業研究会　高等部提示授業、授業研究会の紹介
３月	全校研修会③	・研修報告 ①独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 令和６年度第二期特別支援教育専門研修 （知的障害教育コース） ②令和６年度 特別支援学校授業づくりプロジェクト

６　研究の実際

（１）各学部段階で目指す「伝え合う姿」の具体化と共通理解

第１回学部研究会では目指す「伝え合う姿」を具体化するために、特別支援学校幼稚部教育要領第１章総則第３　幼稚部における教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と特別支援学校小学部・中学部・高等部学習指導要領　国語【思考力、判断力、表現力等】段階の目標（２）イを整理し、提示した。（表２）

表２　目指す「伝え合う姿」の段階

幼稚部	小学部			中学部		高等部	
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	１段階	２段階	３段階	１段階	２段階	１段階	２段階
(9)言葉による伝え合い 先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語りなどに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことなどを伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつようにする。	言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。	出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思いついたり考えたりすることができるようにする。	順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。

この（表２）を参考に「現在の児童生徒の姿」について意見交換するワークショップを行い、各学部段階で目指す「伝え合う姿」を整理して学部で共有した。

第２回全校研究会では学部で共有した内容を整理して、各学部で目指す「伝え合う姿」を提示し、共通理解を図った。（表３）

表３　各学部で目指す「伝え合う姿」

小学部	中学部	高等部
教師や友達の話を関心をもって聞き、思いや考えを表現する姿	自分の思いや考えを相手に伝わるように表現し、相手の思いを受け入れながら聞く姿	※各学年、学習グループ段階で、学習指導要領に照らし合わせた姿

（２）児童生徒の言語能力育成のためのルールづくり

目指す「伝え合う姿」を育むために、国語科「聞くこと・話すこと」に焦点を当て国語科の授業の中で身に付けたい力や授業内でのポイントを学部研究会で話し合い、作成した。小学部では『「きこう」「はなそう」のポイント』、中学部では「伝え合う話し方・聞き方ルール」、高等部では『「聞くとき」「話すとき」のマナー』を作成し、国語科の授業の中で活用した。（表４）

表４　各学部の「聞くこと・話すこと」のポイント

小学部	中学部	高等部
「きこう」「はなそう」のポイント	伝え合う話し方・聞き方ルール	「聞くとき」「話すとき」のマナー(態度)
①どのようなはなしかな ②じぶんとおなじかな　ちがうかな ③ちがうのはどこかな ④わからないことは　しつもんしよう	＜聞き方＞ ・相手を見て聞く(うなずく) ・最後までしずかに聞く ～レベルアップ～ ☆自分の考えと同じところ、違うところを考えながら聞く ＜話し方＞【相手に伝わるように!】 ・聞こえる声の大きさで最後まで話す ・相手を見て話す ～レベルアップ～ ☆伝えたいことを決めて話す ☆理由を付けて話す	＜聞くとき＞ ・話している人に顔と体を向ける ・相手の話を最後まで静かに聞く ・相手の話に反応する(返事) ＜話すとき＞ ・ゆっくり聞こえる声で話す ・考えをまとめて、挙手をして話す ・相手に応じた言葉遣いをする

（３）「横手のスタンダード」を活用した国語科の授業づくり

ア　授業改善コーディネーター、ICT活用推進リーダー等多角的な視点で行う単元検討会（授業設計）

学年部または学習グループで、単元で育成を目指す資質・能力（単元目標）や目標達成に迫るための単元構想とＩＣＴの活用を含めた手立てについて話し合い、単元の「指導計画」を作成した。作成した「指導計画」を基にＩＣＴ活用推進リーダー、各学部の授業改善コーディネーター、学部主事、研究部員、授業者に加えて本校授業づくりプロジェクト担当職員にも可能な限り参加してもらい、単元全体についての検討を行った。単元検討会は、学部授業研究会４回（小学部・中学部各２回）と全校授業研究会３回（小学部・中学部・高等部各１回）の計７回行った。

単元検討会の際には「育成を目指す資質・能力の三つの柱で設定された単元（題材）目標が互いに関連しているか」「小単元（活動）の構成や学習内容が目標を達成するために適切に設定されているか」「児童生徒の主体的な学びを実現するためのICTは有効に活用されているか」を検討した。授業改善コーディネーターからは普段の授業の様子や児童生徒の様子からより実態に応じた具体的な助言を、授業づくりプロジェクト担当職員からは授業づくりプロジェクトより出された「知的障害教育国語科の授業づくり要点リスト」を活用した授業づくりについての助言を受けた。

イ　学部授業研究会、全校授業研究会の実施

学部授業研究会は、小・中学部で各２回提示授業についての研究協議会を行った。授業研究会では、児童生徒の実態が分かる各学部の授業改善コーディネーターや学部職員からより具体的な助言を受け、すぐに改善に結び付けることができた。高等部では、期間を設けて全ての国語科学習グループの授業を見合い、高等部全職員で協議を行った。全ての学習グループを見ることで実態に応じた授業づくりや指導の仕方、板書の仕方など、学部内でのつながりが明確になった。次年度は今回の高等部での取組を参考に、全校体制で授業を見合う機会を設けたい。

全校授業研究会は職員研修日とし、一日日程で実施した。学部縦割りの３つのグループに分かれ授業参観と授業研究会をし、指導助言は児童生徒をよく知る学部主事や教頭が行った。（表５）じっくり授業を参観する体制を整えたことで、協議では活発な意見交換が見られた。

表5 全校授業研究会一覧

時間	学部・学年 学習グループ	単元（題材）名	授業者	指導助言
9:20～ 10:15	小学部３年 ②グループ	「すきなもの　なあに」	鶴田美穂	小学部主事 熊谷淳晴
10:20～ 11:10	中学部１年 ②グループ	「いろいろなお話を読んでみよう・楽しもう ～『のりもの』をくわしくせつめいしよう！～」	柴田秀幸	中学部主事 堅持夕子
11:15～ 12:05	高等部２年 ②グループ	「群読しよう」	谷藤弘美	教頭 髙橋和恵

各学部の具体的な取組や成果と課題については、「Ⅱ各学部の取組」に記載している。

（４）国語科の授業改善と言語環境の整備に向けた職員研修の充実

ア　全校研修会の実施と他校種授業参観、他校授業研究会等への参加・報告

今年度は全校研修会を３回計画・実施した。（表１参照）

第１回は授業づくりの基礎・基本を全校職員で共通理解するために、「横手のスタンダード」の内容について全職員で確認した。年度初めに確認したことで、年間指導計画の作成やチームで行う授業づくりに生かすことができた。

第２回は本校の清水潤校長から「知的障害教育における国語科の授業づくり～学習指導要領及び本校の研究を踏まえて～」と題し、研究主題に沿った内容の講義を受けた。「授業づくりの基礎を学ぶことができた」「学習指導要領や教科書解説をよく読んで授業づくりを進めたい」「児童生徒の生活全体を把握することの大切さを感じた」など、教職員から感想があり、今後の指導や授業改善に生かすことができた。

第３回は研修報告を実施した。研修をとおして学んだことや授業づくりプロジェクトの成果を全職員で共有し、理解を深める機会とした。

イ　他校種授業参観、他校授業研究会への参加と研修報告の共有

横手市内の他校種（小・中学校）授業参観については、小・中学校の指導主事計画訪問に合わせて授業参観を行った。（表６）授業参観後は研修報告書と指導案を全校回覧し、研修内容を共有した。

表6　小中学校授業参観の実施状況

期　日	学　校	学年	教科等	人数
７月12日	平鹿中学校	２年 ３年	数学 国語	１名
７月17日	朝倉小学校	４年	国語	１名
７月19日	平鹿中学校	１年 ３年	道徳	１名
９月25日	横手南中学校	２年	道徳	２名
10月23日	横手北中学校	２年 ３年	外国語科	１名

期　日	学　校	学年	教科等	人数
10月30日	横手北小学校	３年 ４年	国語	１名
11月21日	旭小学校	３年 ４年	国語	２名
12月16日	雄物川小学校	１年 ３年	国語	１名
12月18日	十文字小学校	３年 ６年	算数	１名
合　　計				11名

国語科の授業づくりの参考とするために、国語科を研究対象の指導の形態としている県南の特別支援学校の全校授業研究会に各学部から計６名が参加した。研究会の内容については報告書を全校回覧して共有した。

ウ　職員対象の【言語環境】に関するアンケートの実施

９月に職員の言語環境整備に関する意識を高めることを目的に、【言語環境】に関するアンケート調査を行った。アンケート14項目のうち「できている」「少しできている」の割合が80％を超える項目は６項目あった。（表７）

表7 【言語環境】に関するアンケート のアンケート項目と「できている」「少しできている」の割合

	項　目	割合(%)		項　目	割合(%)
①	安心して話せる環境づくり	98	⑧	教材・教具、ICTの活用	79
②	児童生徒を待つ姿勢	93	⑨	分かりやすい板書	67
③	丁寧な言葉遣い	86	⑩	文字の大きさ、丁寧さ	67
④	分かる言葉での指示・説明	93	⑪	正しい書き順や文字	73
⑤	生活年齢に沿った言葉	98	⑫	情報提示の仕方	67
⑥	話の速度や間の取り方の工夫	88	⑬	学びの提示の仕方	65
⑦	言葉の視覚化	74	⑭	学びの振り返り	73

７　全校研究における成果と課題

（１）成果

ア　児童生徒の「自分の思いや考えを伝え合う姿」をイメージした授業づくりと児童生徒の変容

本研究における「自分の思いや考えを伝え合う姿」の捉えを提示し、そこから児童生徒の実態を加味した各学部の目指す姿を検討したことで、目指すべき児童生徒の姿が具体的になった。国語科は児童生徒の実態に応じた少人数の学習グループがほとんどであるが、目指す「自分の思いや考えを伝え合う姿」が具体的になったことで、学習指導要領を基に学習グループの年間指導計画や年間目標、単元（題材）の構成等を改善し、授業実践に取り組むことができた。全校授業研究会で提示する授業については、授業改善コーディネーターやＩＣＴ活用推進リーダー等校内の人材を活用し多角的な視点から授業設計を行った。学習グループの単元（題材）計画や単元目標、本時の目標や学習活動について話し合うことで、現在の児童生徒の姿からひとつ先の「自分の思いや考えを伝え合う姿」をイメージした授業づくりに取り組むことができた。

児童生徒の実態に応じて「自分の思いや考えを伝え合う姿」を目指した国語科の授業づくりをしたことで、児童生徒が自分なりに思いや考えをもち、その思いや考えを友達や教師に「話したい」「聞いてもらいたい」と伝えようとする姿が見られるようになった。また、【言語環境】に関するアンケートの「安心して話せる環境づくり」は、「できている」「少しできている」の割合が98％であった。日頃から職員が児童生徒の話を傾聴する・受容する姿勢を示して児童生徒が安心して話せる環境をつくっていることが、国語科の授業の中でも児童生徒が安心して思いや考えを伝える姿に結び付いたと考える。

イ　学部で目指す「聞く・話す」姿の定着

研究を進める中でどの学部でも「自分の思いや考えを伝え合う」ためには、相手の話を聞くことや児童生徒の話し方が大切であると考え、学部に応じた児童生徒の言語能力育成のためのルールづくりに取り組んだ。（表４参照）

国語科の授業の中で掲示し、繰り返し確認することで、聞く姿勢が整ってから話し始めたり、周りの友達に話を聞くように促したり、児童生徒が「聞くこと」を意識する姿が見られるようになった。また、相手に伝えるためには相手が分かるように話すことが大切であることに気付き、伝える相手を見て話す、ゆっくり・はっきりと話そうとする、考えをまとめてから話すなど、国語科の授業における「聞く・話す」姿が定着してきた。

ウ　言語環境整備に対する意識の高まり

【言語環境】に関するアンケートから、児童生徒が話しやすい雰囲気づくりや丁寧な言葉遣い、生活年齢に沿った言葉選び、ICTの活用など、日頃から教職員が児童生徒の言語能力の育成を支える言語環境の整備に意識して取り組んでいることが分かった。アンケートの結果を共有したことが、職員自身の言葉選びや話し方、話の

聞き方、書字の仕方を振り返ったり見直したりする機会になり、さらなる言語環境整備の意識を高め、児童生徒の言語能力の育成に反映されたと考える。

（２）課題

ア　より大きな集団での「自分の思いや考えを伝え合う姿」の育成

国語科の授業の中では、児童生徒の「自分の思いや考えを伝え合う姿」が見られるようになったが、国語科の学習グループは少人数で構成されていることが多い。児童生徒の「自分の思いや考えを伝え合う姿」がより生きた姿になるためには、集団が大きくなっても同じように「自分の思いや考えを伝え合う姿」を発揮できることが必要不可欠であると考える。また、国語科は小学部と中学部では週３時間、高等部では週２時間と週時程上指導の時間が少ない。身に付けた力の定着を図るためには日常的な指導が必要であり、学習グループから学級、学年、学部、学校、地域とより大きな集団の中で「自分の思いや考えを伝え合う姿」を育むことが必要であると考える。

イ　「伝え合う姿」や「聞く・話す」ルールの学部間のつながり

各学部の取組においては、国語科で身に付けた「聞く・話す」姿が他教科や各教　科等を合わせた指導でも見られるようになってきていると成果が挙げられている。しかし、今年度は学部独自の取組であり、学部間の系統性や一貫性をもたせることができなかった。児童生徒が身に付けた言語能力をどんな場面でも発揮する姿を目指すためには、「伝え合う姿」や「聞く・話す」ルールなど12年間の成長を見通して系統的で一貫性のある指導が必要と考える。各学部の取組を大事にしながら学部間での情報交換や全職員で共通理解する機会を設けていきたい。

ウ　国語科で身に付けた資質・能力を他の学習場面につなげるための工夫

今年度は年間指導計画の「関連する指導の形態等活用する地域資源」に関連する教科や各教科等を合わせた指導を表記したが、国語科の「聞くこと・話すこと」　「書くこと」「読むこと」との関連について具体的に示すことができなかった。国語科と他の学習場面との関連を明確にすることで、児童生徒が国語科で身に付けた言語能力を他教科や各教科等を合わせた指導で発揮できるように意識して指導することができると考える。授業設計をする際に、国語科の指導内容と他の学習での活用場面を関連付けるツールを活用する等、つながりを明確にするための工夫が必要である。

〈第二部〉

各学部の実践

Ⅰ　小学部の実践

１　児童の実態

小学部は障害の特性や身体の状況が様々な児童が 31 人在籍している。学習の多くは学級単位であるが、体育と音楽は低学年と高学年に分かれ、合同で行っている。また、学部集会や休み時間などは、１年生から６年生まで学年を超えた関わりの場面も見られる。

多くの児童が教師や友達との関わりを好むが、意思表出については、言葉で表すことが難しく、行動や発声等で表す児童から、友達や教師と会話でやりとりする児童まで様々である。会話が可能な児童であっても、仲のよい友達と簡単な言葉でやりとりを楽しむ児童もいれば、友達にうまく気持ちなどを伝えられない児童もいる。

２　研究の実際

（１）学部研究の取組

ア　小学部児童の「伝え合う姿」についての確認

小学部の職員の話合いやアンケートから「伝え合うにも段階があるのではないか」「伝え合うには聞くことも大事」「小学部段階ではまず、伝えることも含めて伝え合う姿を考えていってはどうか」等の意見が出された。

児童の「伝え合う」段階は、「教師と児童」から始まり、「教師の仲介による児童と児童」そして、「児童と児童」というように成長していく。児童の「伝え合う」表現方法としては、言葉、カード（絵、写真）、身振り、手振り、うなずく、拍手、姿勢（相手に体を向けるなど）、表情、指差し、発声、書き言葉等、児童によって、または場面によって様々である。

これらのことを踏まえて、小学部で目指す「伝え合う姿」を考えた。

【小学部で目指す「伝え合う」姿】
教師や友達の話を関心をもって聞き、思いや考えを表現する姿

イ　「きこう」「はなそう」のポイント（図１）の活用

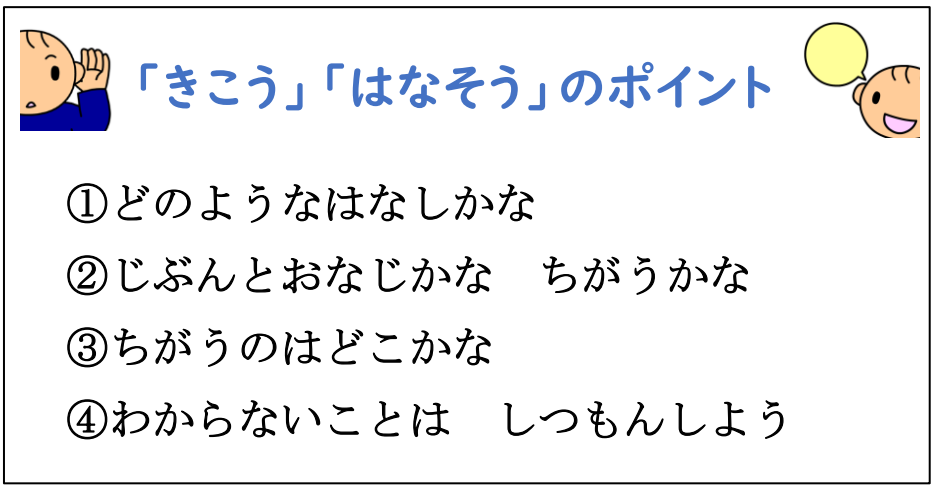


図１　小学部「きこう」「はなそう」のポイント

小学部では「聞く」ということを大切にしたいと考え、「きこう」「はなそう」のポイントを各学級に掲示した。児童が聞いたり、話したり、伝えようとしたりするときの参考にしたり、教師の意識付けにしたりしてほしいと考えた。児童には実態がそれぞれであり、学級または児童、場面によって変えて使用していくことにした。

ウ　「伝え合う姿」シート（図２）の活用

小学部の授業研究会では、児童の伝え合う場面を明確にするために、「伝え合う姿」シートを活用した。事前に授業者が「伝え合う姿」が予想される注目してほしい場面と教師の働き掛けの工夫等、予想される児童の「伝え合う姿」を記入し、参観者が児童の伝え合う姿に注目できるようにした。授業後には、実際の授業での児童の「伝え合う姿」と評価を記入し、授業研究会のグループ協議で活用した。

小学部　第３学年　国語科　授業研究会
（「伝え合う姿」シート）

題材名「すきなもの、なあに」
日　時：令和６年１２月６日（金）９：３０～１０：１５
指導者：鶴田美穂（T１）

１　「伝え合う姿」が予想される注目してほしい場面と教師の働きかけの工夫等

＜注目してほしい場面＞
二人で好きなものとその理由について話す活動
＜教師の働きかけの工夫等＞
わけを聞く言い方を黒板に示す。
言葉を掛けずに、称賛のうなずきをしたり、黒板を指さすなど身振りでヒントを示したりする。やりとりの後によいところを取り上げて評価して伝える。

２　予想される児童の「伝え合う姿」
（児童の話を聞く姿や表現しようとする姿、教師の仲介等）

友達の顔を見て自分の好きなものを話す・聞く。
友達の好きなものを聞いて、「どうしてすきなの？」と問い掛ける。
好きな理由を自分の言葉で話す。

３　実際の授業での児童の「伝え合う姿」
（児童の話を聞く姿や表現しようとする姿、教師の仲介等）

相手の顔を見て話をしたり、話の内容をしっかり聞いたり、うなずきながら相手の話を聞いたりした。
相手の話を聞いて「どうしてすきなの」と自分から聞いたり、理由を聞かれたときに自分で考えて答えたりして、児童二人だけで好きなものとその理由を伝え合うことができた。友達の好きな理由を聞いた後で「そうなんだ」と思ったことを伝えることもできた。
友達の好きな理由をよく覚えていて、振り返って答えることができた。

４　評価（よかった点○、改善点△）

＜教師の働きかけの工夫等＞
○やりとりの悪い例と良い例を動画で示し、言い方を視覚的に黒板に掲示することで良いやりとりの仕方を理解して進んで行うことができた。
○児童二人でのやりとりの後、よかったところを評価したり、理由を聞いて思ったことを伝えてもよいことを話したりしたこと、やりとりの後で、友達が好きな理由を質問したことで、自信をもってより積極的に伝え合ったり、友達の話をしっかり聞いたりすることができた。
○メモに書き取ることで自分や友達が話したことを視覚的に確認できた。
△黒板の形状と児童の位置により、高い位置の板書を見るのが大変そうだった。
△友達の好きな理由について詳しく聞き返してもよいことや、その聞き方を伝えることができず、単純な理由を答えるやりとりで終始した。

図２　小学部「伝え合う姿」シート

（２）授業づくりの実際

＜小学部１年生　「おめんです～ともだちだれかな～」＞

【単元検討会の様子】

・平仮名一音一音の発音よりも、友達や先生の名前など、身近なものを取り入れた方がよい。

・伝え合う…１年生なので、友達というよりも、教師の話を注目して聞く、答える、まねする等の学習内容が適切ではないか。

【単元の目標】

・教師や友達と一緒に自分や友達、身近な教師（担任）の名前を発語したり、線をなぞったりすることに慣れる。　知　技

・自分や友達、身近な教師（担任）の顔写真と名前カードをマッチングさせる。　思判表

・相手に発語して伝えたり、相手に注目して発語を聞いたりする経験を積む。　学　人

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　７/15）

・教師の模倣をして友達の名前を発語したり、顔写真を友達の名前カードとマッチングしたり、点と点をつなぐ線をなぞる経験をしたりする。

・友達に向けて発語したり、発語する友達に注目して聞いたりする。

□主な活動

・ともだちだれかな？（友達の顔写真と名前カードのマッチング）

・ちゃれんじ（点と点をつなぐ直線のなぞり書き）

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫	児童の姿
・児童ができるだけはっきりと発語できるように、一音ずつはっきりと発音する。 ・自分から積極的に発語するなど、意欲がもてるように、うまく発語できた際は称賛する。	・「ともだちだれかな？」では、教師の音声による見本を模倣し、一緒に発語することができた。 ・振り返りの場面では、自分の頑張ったと思う活動を選択し、友達に身振りや発語で伝えた。話を聞いていた友達も、最後まで話を聞き、発表した友達に拍手をしていた。

【成果と課題（成果◯、課題●）】

◯教師の音声を一語ずつ模倣し、聞こえる声で発語ができた。

◯教師の称賛が発語しよう、友達や教師に伝えようとする意識につながった。

●伝え合う場面では、席が２ｍほど離れていたため話の聞き取りづらさがあった。
⇒児童の距離をもう少し近づける。

●学習活動３「ちゃれんじ」における、書く活動に難しさがあった。
⇒なぞる線を太くする、直線のみのなぞりがきにするなどの工夫が必要。

●教師の言語環境の整備。⇒正しい言葉遣い（横文字を使わない）で話す。

＜小学部６年生　「ともだちにつたえよう～ぼく、わたしのおすすめえほん～」＞

【題材検討会の内容】

・おすすめ絵本の紹介シートを作る学習は２回目。①表紙②大まかな内容③好きな登場人物④好きな場面⑤裏表紙を、ロイロノート・スクールを使って作成する。

・シートの作成や感想発表をとおし、理由を書いたり自分の気持ちを加えて感想を話したりする伝え方を学ばせたい。

・「言葉が繰り返される面白さ」や「言い回しのおもしろさ」にも気付いて文章を作ったり、感想を発表したりできるよう、児童が前回作成したシート等を提示しながら指導したい。児童が７名のため、できるだけ短時間で感想を伝え合えるよう、伝え合う時間はペアで行う。

【題材の目標】

・理由を伝えるときの話型や気持ちを表すいろいろな言葉を知る。　知　技

・自分の好きな本の大まかな内容や、好きな登場人物等を、短い文で表したり、それに適したイラストや好きなイラスト（S・I、S・N）を選んだりする。　思判表

・自分の好きな本を友達に紹介したり、友達が紹介する本に関心をもって話を聞いたりする。　学　人

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　４/６）

・好きな登場人物を選び、その理由を短い文で表す。　思判表

・友達が紹介する本に関心をもって話を聞く。　学　人

□主な活動

・紹介シートをつくる。

・ペアで話し合い、感想を伝え合う。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫	児童の姿
・理由が分かるように書くときの語句の使い方が分かるように、「わけは」「～だからです。」という定型文のサンプルシートや前回児童が書いたシート、パネルを提示する。	・定型文のサンプルシートを提示したり教師が個別に言葉を掛けたりすることで、児童は定型文を意識しながら紹介文を書くことができていた。前回の児童のシートを紹介したことで、児童の意欲が高められた。
・理由を伝えるときの定型文が使われているかどうかやおもしろい表現、興味を引かれる表現、すごいなあと思う表現などを伝えられるように、聞くときのポイントを提示する。	・ポイントを提示することで、定型文が使われているか評価ができたり、よい表現を見付けて感想を発表したりする姿が見られた。
・ペアで話し合い、感想を伝え合う。	・ペアで伝え合うことで、緊張せずに自信をもって伝え合うことができた。また、次時の全体での発表にもつながる場になった。

【成果と課題（成果〇、課題●）】

〇定型文のサンプルシートや聞くとき・話すときのポイントを提示したり、前回児童が書いたシートを紹介したりすることで、児童がポイントを意識して書いたり伝えたりすることができた。また、ペアでの話合いにしたことで、児童は自信をもって発表し、伝え合う活動を短時間で行うことができた。

●より分かりやすい授業にするための、教師の説明の簡潔化とねらいに沿った板書の整理。

＜小学部３年生　「すきなもの、なあに」＞

【題材検討会の内容】

・共通した好きなものの項目を出して、絞ってやってみると面白い。
・クイズでは感想のやりとりができるとよい。
・第４次の「感想を交流する」学習は難しいかもしれない。「感想を伝える」が適しているのではないか。
・聞く人が多くなると意欲が高まる。伝え合う活動が答えようとする姿につながる。
・やりとりを繰り返すことで般化されるので発展の可能性がある。

【題材の目標】

・自分の好きなものとその理由を２文に表したり、友達に伝えたりする。　知　技
・自分の好きなものを選んだり、好きな理由を考えたりする。　思判表
・進んで自分の好きなものとその理由を考え、友達に伝えようとしたり、友達のすきなものに関心をもって聞いたりする。　学　人

【題材の概要】

自分の好きなものとその理由を言葉や文で伝え合う活動をとおして、特別支援学校学習指導要領（小学部）国語科、第２段階〔思考力、判断力、表現力〕Ａ聞くこと・話すことのア、ウ又は第３段階〔思考力、判断力、表現力〕Ａ聞くこと・話すことのウ、オ、カに当たる内容を学ぶ。

好きなものやその理由についてじっくり考える中で、自分の思いや考えを表す言葉を知り、友達に伝えたいという意欲を高め、質問をする活動を通して、友達の好きなことにも関心をもって聞く姿勢を育む。さらに、理由が分かると好きなことがよく伝わることに気付き、理由を話すことのよさを実感する経験をとおして、理由を話す言い方や書き方の定着を目指す。また、これらの学習をとおして、普段の学習や生活においても理由を考えたり、自分の思いや考えを児童同士で伝え合ったりしながら活動できるようになることを期待し、本題材を設定した。

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　３/５）
　・好きなものとその理由を友達に話したり、聞いたりする。
□主な活動
　・好きなものを伝える。理由を尋ねる。理由に答える。
□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫	児童の姿
・話し方の悪い例とよい例を動画で示し、質問の聞き方を黒板にイラストと吹き出しで示す。 ・言葉を掛けずに、称賛のうなずきをした	・よいやりとりの仕方を理解して進んで取り組み、相手の顔を見て話をしたり、話の内容をしっかり聞いたり、うなずきながら相手の話を聞いたりした。

り、黒板を指さすなど身振りでヒントを示したりする。 ・児童二人でのやりとりの後、よかったところを評価したり、理由を聞いて思ったことを伝えてもよいことを話したりする。	・相手の話を聞いて「どうしてすきなの」と自分から聞いたり、理由を聞かれたときに自分で考えて、自分の言葉で答えたりして、児童二人だけで好きなものとその理由を伝え合うことができた。 ・友達の好きな理由を聞いた後で「そうなんだ」と思ったことを伝えることもできた。

【授業研究会での主な協議内容と改善案】

二人で話す活動をより充実させ、45 分間の授業を成立させる方法について協議し、次のような改善案が出された。

・友達が紹介したものの中からよいと思ったものを一つ決める、伝言ゲームのように相手が話したことを教師に伝える等、楽しめる活動を取り入れながら 20 分と 25 分の活動を組み合わせて授業をする。
・導入時に関連する活動（日常生活についての会話など）や書く活動も取り入れる。
・思いや考えをさらに伝えられるように、話をつなげたり、理由を掘り下げたりする。
・自分たちのやりとりをしている様子を撮影して見る。
・児童に合う形で難易度をもう少し上げる。課題の量を増やす。
・時間配分のための課題を準備する。

【指導助言（学部主事　熊谷　淳晴）】

自分の好きなことを友達に伝えることができていた。話す態度もよかった。理由やメモがあることで、話の内容を確認できていた。友達の詳しい言葉も聞き取っていた。板書がシンプルに整理され、活動することが一目で分かる視覚的支援であった。

授業が早く終えたことについて、もう一度行う、次の課題を少しずつ提示する、サプライズで好きなことについて追加の課題を出す、次の授業につなげる活動をする等の方法があってもよかっただろう。

話形はオーソドックスでも、思考の過程に沿って「私はいもむしが苦手だけど、ちょうちょはきれいだし」のような表現ができると、話すことが広がっていくのではないか。聞くことの「あいうえお」（「あ」は「相手の顔の、あ」など）や話すことの「かきくけこ」（「き」は「聞く人を見ながらの、き」など）も参考にしてはどうか。

「話す」ことは、集団の中で鍛えられる。「読む・聞く」はスポーツで例えると「野球」である。プレーをセットして指導ができるからで、やると急激に上達する。「話す」はスポーツに例えると「サッカー」である。常に流れているからである。話形による指導から膨らませられるように、ボールが来たら、必ず聞き返すようにするとよい。例えば、「水道はいくつあるでしょう」などと問い掛けた際、ただ「３です」と水道の数のみを答えるのではなく、「お風呂場に一つあったね。台所に一つあるね」などというような子どもらしいキャッチボールを引き出して広げていってほしい。

【成果と課題（成果〇、課題●）】

〇好きなものを題材に取り上げ、そのものについて考える時間を設けたこと、その理由を聞いたり答えたりするやりとりをとおして、好きなものやどうして好きなのかということについてじっくり考え、言葉を探すことができた。友達の理由を聞くことで、新しい表現に出会うことができた。

〇友達の考えを知ることで、友達自身への関心が高まり、二人だけでやりとりできたことが自信となって、日常生活においても、自分から話し掛けたり、質問をしっかり受け止めて答えたり、二人で会話のラリーを続けたりする姿が見られるようになった。他の友達に対しても、気持ちを大事にしようとする関わりが見られている。

〇自分の思いや考えの理由を話すことのよさを体験して理解することができ、学習や一日の振り返りの場面で意識して理由を付けるなど、詳しく話したり書いたり、質問に即座に答えたりするようになってきた。

●活動をシンプルにすることで、本時の学びを明確にして児童の学びの実感を高める意図と、児童が思考する時間を十分に確保する意図で授業を展開したが、二人での学習ということもあり、予定していた活動がスムーズに進んで早く終了することあった。その解消のため、残った時間に次時の学習を進めた授業においては、本時に学んだ内容がぼやけて学習の実感が薄れるという様子が見られた。

⇒本時の学びを焦点化しつつ、児童が時間いっぱい活動に取り組みながら本時の学びを実感し、確実に心に刻むことができる授業展開についてさらに検討する。

３　研究のまとめ

（１）成果

ア　「伝え合う姿」シートの活用

「伝え合う姿」シートを活用することで、授業者は授業の目標とする児童の伝え合う姿の具体を考え、その姿に導くための教材の工夫や手立てを整理することができた。また、授業の参観者からは「授業で注目してほしい場面や支援が分かりやすく、評価に有効であった」「参観する視点が明確になり、より深く授業について考えたり評価したりすることができた」などの成果が挙げられた。

児童の「伝え合う姿」が予想される場面や教師の働き掛けの工夫を具体的に考え、予想される児童の「伝え合う姿」をイメージできたことが、児童の伝え合う姿を引き出すことにつながった。

イ　児童の「聞こう」「話そう」とする気持ちの育ち

授業の中で児童が注目するまで待ってから話し始めたり、児童と視線を合わせてから話すようにしたりするなど、教師が児童の話を聞くときの姿勢を意識して話すようなった。そのことにより児童が姿勢を整えたり、友達に教師の方を向くように声を掛けたりするなど、児童が話を聞くために準備する様子が見られるようになった。また、教師が児童同士のやりとりをつなぐよう一層心掛けたことから、友達の話が気になったり、児童同士でのやりとりが続くようになったりするなど、友達の話をよく聞いて友達の話に対して自分の思いを伝えようとするようになってきている。

ウ　言語環境への教師の意識の高まり

教師の言葉も言語環境の一つとしての意識が高まり、児童の実態に応じた分かりやすい言葉を使うようにしたり、話し言葉を使わないようにしたりするようになった。また、児童に知ってほしい、使ってほしい言葉を教師が使用するなど、児童に話す言葉を精選するようになった。児童の「自分の思いや考えを表現したい」という気持ちを高められるように、教師は児童に共感的な態度で接して発語を促したり文章表現の向上につなげたりした。

板書については、大きな文字で見やすい表記（教科書体）にしたり、板書する内容を整理して視覚的に分かりやすくしたりする等、板書の大切さを再認識し、改善が見られた。また、話し方の手本となる映像を準備したり、ロイロノート・スクールを使って本の紹介カード文を作成したりするなど、言語環境を整えるために ICT を活用するようになった。

（２）課題

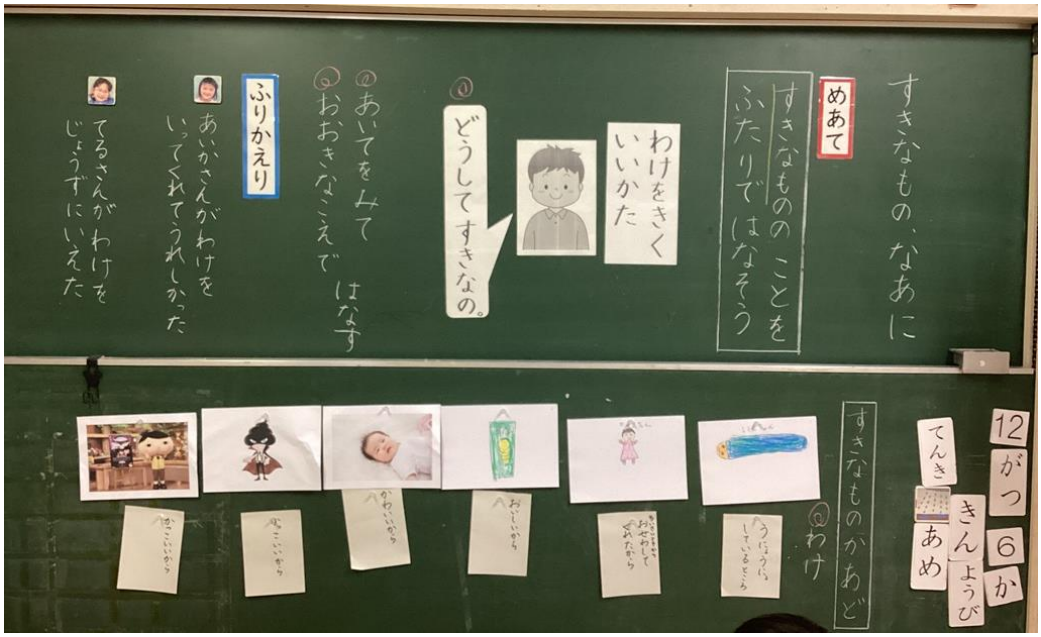
ア　児童の実態に応じた「きこう」「はなそう」のポイントの提示の仕方

「きこう」「はなそう」のポイントが児童自ら考えることにつながった学級や、児童の実態に合わせて注目するポイントを絞って使用した学級があった一方、児童の実態からするとポイントが難しいという意見もあった。「文字が読めない」「自分で

考えて発表することが難しい」などの理由が挙げられた。また、「きこう」と「はなそう」のポイントを分けた方がよいのではという意見もあった。内容を簡単にしたり、内容を精選したりするなど、様々な児童の実態に応じた内容の工夫や、児童が見て分かりやすいイラストを中心とした提示の仕方が必要であった。

イ　より児童同士でのやりとりが広がるための手立て

友達とのやりとりが続くようになったという一定の成果はあったが、まだまだ教師の仲介が必要なことも多かった。あらゆる機会に「聞く」「話す」機会を設けるようにしていくようにし、徐々に教師の仲介を減らせるようにしていければと考える。そして、少人数から大きな集団でもやりとりができるような手立てを考えていきたい。



Ⅱ　中学部の実践

１　生徒の実態

中学部は１年生９名、２年生９名（内12月からの転入生１名）、３年生７名が在籍している。１・２年生は２学級に分かれているが学年合同で学習することが多い。

意思表出については、発語が少ないものの発声やタブレット型端末を使って自分の意思や感情を伝えようとすることができる生徒や、自分の気持ちを優先して友達や教師と簡単な会話でやり取りしながら自分の考えを深めることができる生徒等、対話でのやり取りが可能な生徒が多い。しかし、生活経験や語彙力の不足から自分の意見を伝えられない生徒や、自信のなさから消極的になったり、改まった場面が苦手で思いを伝えられなかったりする生徒もいる。

人との関わりについては、集団での学習に参加することが難しい生徒はいるが、友達とのやり取りや集団での活動を楽しむことができ、意欲的に学習活動に取り組もうとする生徒が多い。話合い活動などの学習を取り入れて、意見交換する場面を多く取り入れているが、一方的に自分の思いや考えを話したり、相手の意見を肯定的に受け取ることが難しかったりするなどの課題もある。

ICTの活用に関しては、普段の学習においてタブレット型端末を使用することが多く、学びや考えを整理したり、整理した情報を伝えるために活用したりするなど、経験を重ねている。自分の考えを伝える有効な手段の一つとなっている。

２　研究の実際

（１）学部研究の取組

ア　中学部における目指す「伝え合う姿」

各学年における目指す「伝え合う姿」をどのようにイメージするかを話し合い、共通点を整理した。どの学年でも「伝える」だけではなく、「伝わる」ように話したり、相手の考えを知ろうとしながら聞いたりすることが挙げられた。そこで、中学部における「伝え合う」姿を次のように考え、研究を進めていくことにした。

中学部で目指す「伝え合う」姿 自分の思いや考えを相手に伝わるように表現し、相手の思いを受け入れながら聞く姿

ここでの「表現」とは、「話す」「書く」など気持ちを伝える様々な方法とし、「相手の思いを受け入れながら」とは、相手の表現に対してリアクションしながら聞く、肯定的に捉えるなどと考え、学部で共通理解して取り組んだ。授業においては、一人一人の生徒の話す姿や聞く姿をイメージして実践に当たることにした。

イ　「かまくらカード」の活用

研究を進めていく上で「伝え合う」姿を引き出すために、伝え合う場面をあえてつくらなくてはならないのではないか、生徒同士が意見交換する場面を必ず設定しなければならないのではないか、という疑問や不安が挙げられた。そこで、始めに昨年度の研究から「めあて」「課題」「展開」「まとめ」「振り返り」の意味と設定に当たって何に留意するのかを確認した。そして、授業の「振り返り」だけではなく「展開」でも分かったこと、学んだことなどを伝え合うことができるのではないかと考えた。これまでの振り返りで活用していた「かまくらカード」（図１）を、伝え合いたいことを明確になるように視点を絞ったり、授業で分かったことを伝え合ったりするためのツールとして「展開」の中でも活用することにした。「かまくらカード」を活用することで、視点を絞った伝え合いができ、他者と考えを共有しやすくなるのではないかと考えた。

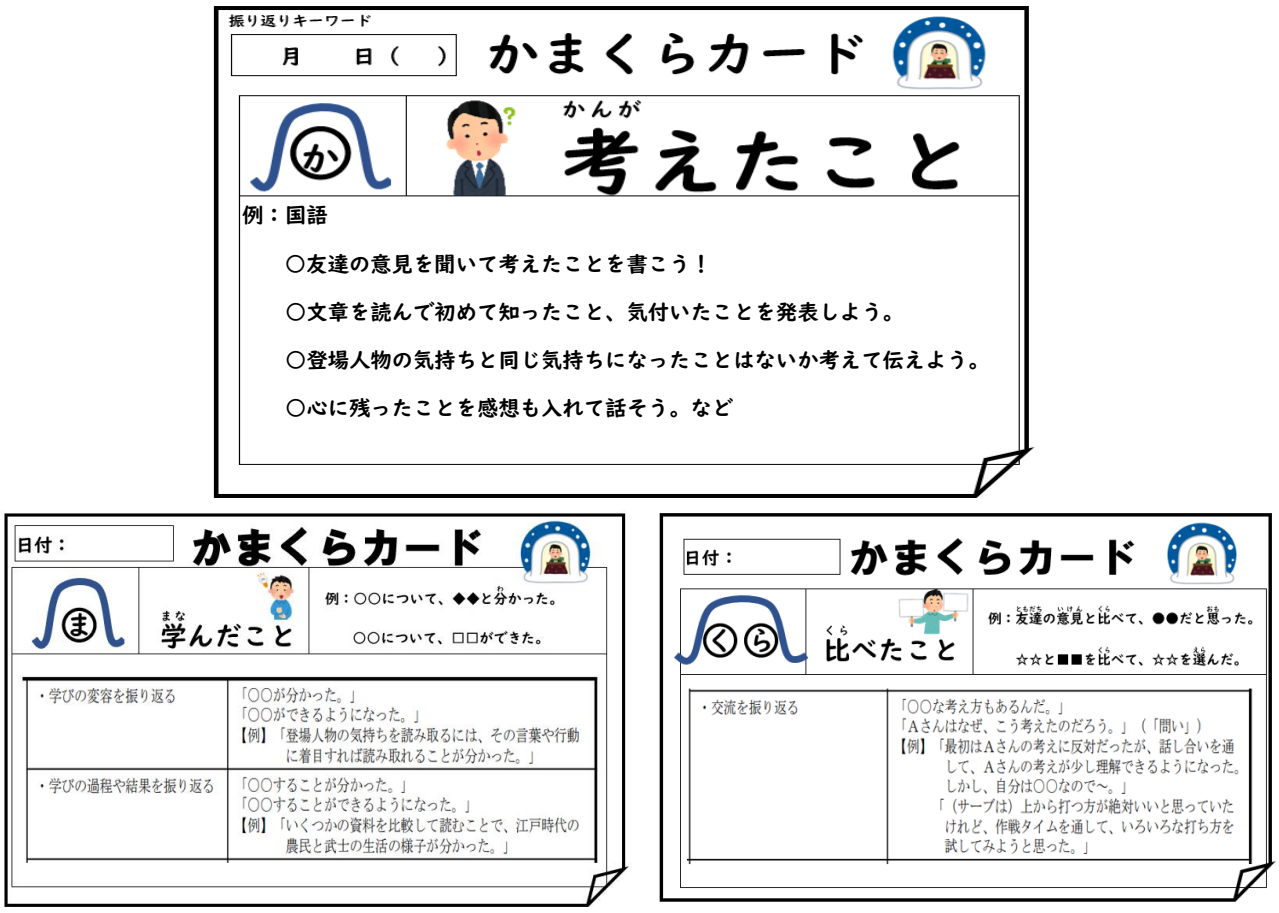


図１「かまくらカード」の視点例

ウ　伝え合うための話し方・聞き方のルール

自分の思いや考えを伝え合うためには、話し方・聞き方に関してきまりがあることで、目指す姿につながると考えた。そこで、「横手支援の付けたい習慣」を参考に各学年で話し合い、共通していた意見を基に「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」（図２）を作成した。基本の部分とレベルアップの部分を決めて学級に掲示したり、机の横に下げてすぐに見られるようにしたりした。

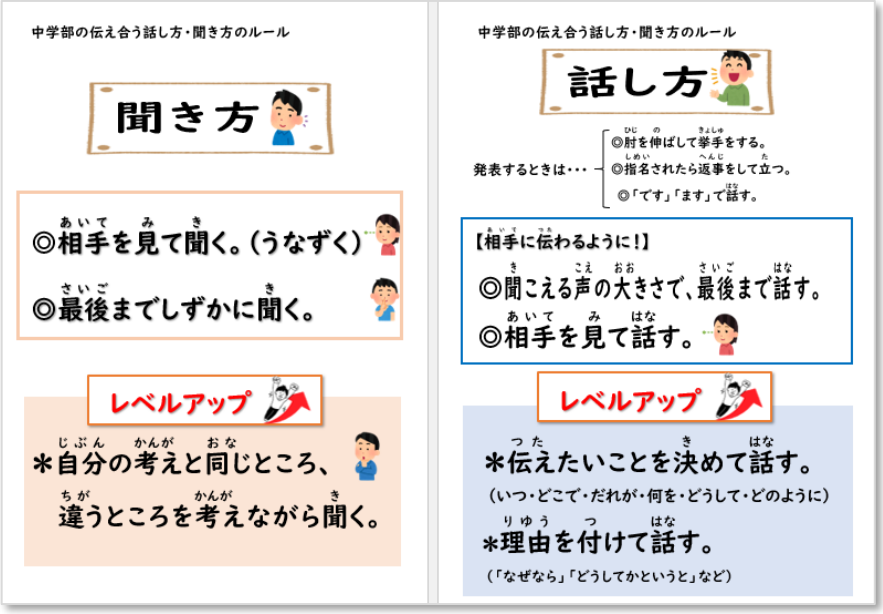


図2　「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」

エ　ICTを活用した学部授業研究会

昨年度に引き続き、学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を活用して学部授業研究会を行った。参観の視点を「話す」「聞く」「言語環境」で色分けし、他グループの話合いも共有できるようにした。(図3)

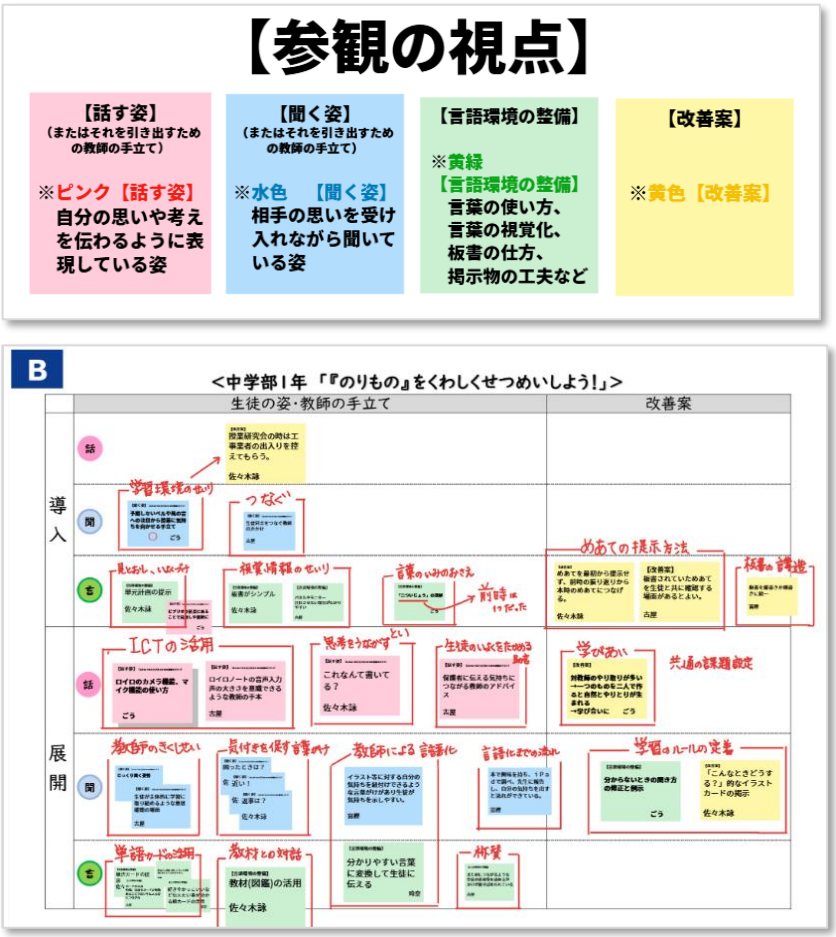


図3　グループ協議の視点及び協議シートの抜粋

（２）授業づくりの実際

＜中学部２年生　「本の魅力を伝えよう③～読書新聞作り」＞

【単元検討会の内容】

・新聞作りは手段であり、本の魅力を伝えるためにできる工夫や表現方法を考える、構成を意識しながら取り組むなどをねらいとしていることを確認した。言葉の使い方や意味を確認したり、使い分けたりなど、言葉を意識して指導する。

・本の魅力を紹介する際、「もし～ならば～である」（条件文）を使って表現するのもよいのではないか。また、文章の構成を考える際はポイントとなることを提示してはどうかなど、意見交換をした。

【単元の目標】

・友達に本の魅力を伝えるため、紹介したい本の構成や読書新聞の特徴、役割を理解し、情報の整理の仕方や配置を考えながら本の魅力の伝え方を知る。　知　技

・伝えたい事柄や自分の考えを明確にし、友達と意見交換しながら伝わりやすい文章の書き方や構成、配置を工夫しながら整理して書き表す。　思判表

・本の魅力やそれを伝える楽しさを知り、主体的に自分の思いや考えを表現しようとする。　学　人

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　５/12）

・紹介したい場面や印象に残った言葉、挿絵などについて、登場人物と自分を比べたり、自分の考えを整理したりして選んだ理由を書く。　思判表

□主な活動

・本の魅力を整理するため、紹介したい文章や挿絵等を書いたカードを見て、選んだ理由を記入する。

・友達同士で意見交換しながら、理由をまとめる。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・あらかじめ「なぜなら」「もし自分なら」などキーワードを入力したカードを用意する。 ・感想や選んだ理由を書く手掛かりとなるポイント（興味があった、印象に残った場面や言葉、挿絵など登場人物との共通点や違う点、読む前と後で変わったこと）を提示する。 ・理由の書き方について、イメージできる言葉になっているか、理由が曖昧ではないかなど、具体的に記入しているか問い掛ける。	・カードを手掛かりに選んだ理由や自分の気持ちを入れて文章を考えていた。 ・ポイントとして提示したシートに沿って、自分が紹介したい場面や挿絵、登場人物との共通点などを整理しながら記入していた。表現が曖昧になっているところは、教師の問い掛けを受けて再考していた。掲示した表現例を見て伝えたいことに近い表現を選び、自分が考えた言葉と組み合わせてまとめていた。

【成果と課題（成果◯、課題●）】

◯学習計画を提示したり、あらすじをまとめたりする際にロイロノート・スクールのシンキングツールを活用した。順序立ててあらすじをまとめることができただけでなく、シートを見合いながら意見交換することで、不足している情報を追加したり、分かりやすい表現に変えたりすることができた。

●読書新聞で紹介する本は、生徒の興味・関心から選択したものだったが、内容を読み込んで理解することが難しく、読み込むために時間を要した。実態に合った本の選択であったか検討が必要であった。

●グループ編制に関して、表現スキルや文章力、理解力の差をどのように補うのか、もっと活発な意見交換のためのグループ編制など再検討が必要であった。

＜中学部３年生　「助詞を使って文を作ろう②」＞

【単元検討会の内容】

単元計画の中で、通年で指導していくことや繰り返し積み重ねていくこと、評価の観点の整理、助詞の使い方を学習する場面と実際の文章を作る学習場面を分けることなどについて検討した。

【単元の目標】

・「は」「が」「で」「を」などの助詞の使い方に慣れ、楽しみなことや頑張ることなどを簡単な文章にする。　知　技

・自分が楽しみなことや頑張ることなどを考えたり、文章にしたりする。　思判表

・自分が楽しみなことや頑張ることなどの思いや考えを伝え合う。　学　人

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　７／12）

・文章で使う助詞を選び、修学旅行で楽しみなことや頑張ることの文章をつくる。　思判表

□主な活動

・教師の読み聞かせを聞く。

・ワークシートの穴埋め文章に助詞を入れる。

・修学旅行で楽しみなことや頑張ることをワークシートに記入し、発表する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・タブレット型端末の学習支援アプリに助詞の部分が穴埋めになっているワークシートを用意する。 ・発表者の内容に注目できるように、モニターにワークシートを映す。 ・正しい助詞を使って文章ができたかを確かめることができるように、他の生徒に正しいか問い掛け、正解を伝える。	・繰り返し学習してきたことにより、生徒が何をするのかが分かって、穴埋めのワークシートに助詞を記入していた。 ・発表する生徒は自信をもって伝えたが、モニターを注視する生徒と難しい生徒がいた。 ・助詞の使い方を確かめる場面では、モニターを見て正解、不正解に盛り上がる生徒、注目しない生徒がいた。

【成果と課題（成果◯、課題●）】

◯これまでの学習の積み重ねがあり、今までの経験や体験と関連付け、学習の流れに見通しをもって取り組むことができた。

◯タブレットを効果的に使い「書く」「話す」を補っていた。伝えたい気持ちや意欲があるため、発語の伝わりにくさや苦手さに有効であった。

◯「は」「の」を適切に入れたとき、区別ができていることを即時評価し、気を付ける場所を意識付けられた。

●振り返りについて、発表を聞く生徒に仲立ちが必要と思われる場面があった。友達は何を言おうとしていたのか聞こうとする気持ちに意識を向ける手立てが必要であった。

●助詞の前後が決まっていると分かりやすいが、助詞の前後が空いていると、難儀する生徒がいる。入れてほしい助詞が決まっていたら、その前の空欄に「どこ」を入れるのだと伝えるなどの工夫が考えられる。

●読み聞かせについて、今回のように修学旅行への期待感がもてるように活用するならば、めあての前に読み聞かせ（注目する、話を聞く、いろいろな表現に触れる、気持ちを落ち着けるなど）を取り入れるなど、１単位時間の中でどこに配置したらよいか検討が必要だった。

＜中学部１年生　「いろいろなお話を読んでみよう・楽しもう
～『のりもの』をくわしくせつめいしよう！～」＞

【単元検討会の内容】

□単元計画

・年間指導計画を活用した単元の積み重ねから「本への興味→本の内容や読んだ感想のやり取り→本時」という流れが指導案に現れるとよい。これまで取り組んできた読書月間・読書週間の流れから本単元に取り組んだということが分かるとよい。

・育成する資質・能力の明確化や具体化、単元の目標を達成するためにふさわしい言語活動を選定することが大切である。教師は生徒の気持ちを代弁したり、かみ砕いて伝えたりするなどのやり取りをとおして言語活動の充実を図る。

・単元をとおして生徒がどのような言葉を身に付けられればよいのかを具体的にすることでねらいが明確になり、目標や扱う教材が決まってくるのではないか。

□目標

・☆本教科書以外の図書を活用するのであれば、単元の設定理由にも図書の活用が分かるようにするとよい。

・生徒自身が伝える相手を意識して言葉を選んだり、文を考えたりすることが難しい場合がある。そのため、まずは「思いを伝えようとする」ことや「相手の話を聞こうとする」ことを目標にする方が適切ではないか。

□単元観

・PTA授業参観で保護者に向けて発表する場面を単元のまとめに設定している。この活動をとおして生徒がどのような力を身に付けていくのか、指導案に明記するとよい。

□本時の展開

・振り返りの場面では、本時に考えた文が、前時と比べてどのようによくなったかなど生徒一人一人が自分の学びを振り返ることができるようにするとよい。

【単元の目標】

・乗り物の特徴を説明するための言葉を覚えたり、増やしたりする。　知　技

・様々な乗り物の特徴を知り、自分の思いや考えに合う言葉を選んで話したり、文を書いたりする。　思判表

・言葉を選んで自分の思いや考えを伝えようとしたり、相手の話を聞こうとしたりする。　学　人

【単元の概要】

☆☆☆教科書の教材「のりもの」は、新幹線と飛行機を取り上げた簡単な説明文であり、それぞれの乗り物の特徴等について、簡潔に説明されていて理解しやすい構成になっている。本文中に含まれる新幹線を表す特徴的な言葉として「はやく」「たくさん」といった言葉がある。飛行機を表す特徴的な言葉として「そら」の後に「とお

く」「はやく」がある。これらの特徴を説明する言葉を意識して読むことで、語彙を増やし、乗り物についてより詳しく説明することができるようになると考える。

教材「のりもの」の発展として図鑑等の図書を活用し、通学や買い物、旅行など、生徒の生活に身近な乗り物をいくつか取り扱う。乗り物について説明する活動を繰り返し、一単語での簡単な説明から、徐々に複数の言葉を使った詳しい説明を考えていくようにする。さらに、繰り返しの活動をとおして友達や教師の意見から考えを広げたり、反対語に触れてより語彙を増やしたりすることが期待される。

単元の最後には、PTA授業参観で学習成果を発表する場面を設定する。聞き手を具体的にイメージすることで、意欲をもって乗り物について考えたり、自分から伝えようとしたりするのではないかと考え、本単元を設定した。

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　6/8）

・乗り物について説明するために、「大きくて、速い」など二つ以上の言葉を組み合わせて詳しい説明を考えたり、文を作ったりする。

□主な活動

・図鑑や本を読んで、好きな乗り物を選び、二つ以上の言葉を使って説明する文章を考える。

・タブレット型端末を使用して、考えた文章をワークシートに記入する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・乗り物の特徴を表すための単語を選んで文で表す学習であることを伝えるために、かまくらカードを提示した。 ・文字が書けなかったり、書字に苦手意識があったりする生徒が乗り物の説明を考えることに集中できるように、タブレット型端末を使用したワークシートを準備した。 ・言葉のイメージを想起しやすいように単語カードにイラストを入れ、必要に応じて教師が言葉を読み上げた。 ・保護者や友達に乗り物の説明を発表する場面を設定した。	・かまくらカードを使用して授業で取り組む内容を視覚的に分かりやすく伝えたことで、生徒は自信をもって活動に取り組んでいた。 ・単語カードや音声入力を活用して、ワークシートに自分の思いや感じたことを表していた。 ・単語カードを組み合わせて乗り物を説明したり、単語カードを参考にして乗り物の色について友達に意見を伝えたりしていた。 ・イラスト付きの単語カードを用いて乗り物を説明する文を考えたことで乗り物についてのイメージを深め、発表することができた。

【授業研究会での主な協議内容と改善案】

授業研究会では学習規律の定着に付いての話題が多くあった。具体的には、適切な会話の距離を保つこと、相手の状況に応じて待つこと、状況を判断し自ら質問するのを待つこと、話を聞く態度など、よりよい学習態度や守るべきルールについて検討した。また、生徒の発言を板書に記録し、振り返りに活用することや、生徒の気付きを基に授業づくりをすることで、生活経験を補完できるような学習内容にできる可能性についても議論された。さらに、言語環境の整備については、単語カードの活用やICTとアナログ教材の併用、生徒の言葉を生かしたまとめなど、具体的な方法が提案された。これらに加えて、話形や語順の指導などの正しい文法の習得についても検討された。

【指導助言（中学部主事　堅持 夕子)】

中学部の目指す姿が見られた授業である点が評価された。生徒は、課題を理解して「もっと課題に取り組みたい」と意欲的に活動していた。教師が生徒一人一人に丁寧に向き合って話したり聞いたりしており、生徒の話す力や聞く力の高まりを意識した授業展開がされていた。安心して学習に取り組める環境が整えられており、単語カードなどの教材も生徒の思考を促す効果的な言語環境となっていた。

改善点としては、生徒の言葉やワークシートの内容をさらに生かしたまとめにすること、動画を活用して乗り物の特徴について知る活動を学習に取り入れること、生徒の経験と知識を結び付け言葉で考える過程を重視すること、学習内容を生活にどのように結び付けるか検討することなどが挙げられた。

【成果と課題（成果〇、課題●)】

〇図鑑や単語カードなど、提示する情報量を整理しつつ、生徒が手に取って確認できるアナログなものと、書字の苦手さを補完するためにICTを活用したことで、生徒が意欲的に課題に取り組んでいた。

〇安心して活動に取り組める環境と学習の積み重ねにより、生徒が課題を理解して進んで活動に取り組んでいた。

●生徒が本時のめあてを理解できるように、より明示的に学習の中で取り上げる必要があった。

●生徒が教師の話を聞きながらタブレット型端末を操作するなど、学習ルールの定着が不十分な部分があった。必要な場面では、学習を止めて生徒にルールを伝えることも必要であった。

●生徒はワークシートの様式を使って、自分の思ったことや感じたことを言葉でまとめていた。また、学習活動の中で乗り物を説明しようとしてたくさんの言葉のつぶやきがあった。本時の授業は教師主導でのまとめになっていたが、活動の中で出てきた生徒の言葉を生かしてまとめることで、より生徒にとって分かりやすく実感のあるまとめになったのではないか。

３　研究のまとめ

（１）成果

ア　個に応じた伝え方の工夫と生徒の伝え合おうとする意識の高まり

・授業の展開やまとめにおいて、自分の思いや考えを言葉や発声で表現するのか、文章で伝えるのかなど、教師が個に応じて手段や方法を工夫することで、正しく文字で書こうとしたり、教師に思いをたくさん伝えようとしたりすることが増えてきた。ワークシートを手掛かりに一人で思いや考えを書き表すだけでなく、ホワイトボードを活用し、教師とやり取りしながら自分の思いや考えを整理していくなど、伝えようとする気持ちが高まった。さらに、生徒が表現したことが相手に伝わるよう、教師が仲立ちをして言葉を引き出したり、何度も問い直したりすることで、「伝えよう」「何を伝えたいのか聞こう」とする意識が高まってきた。どのように伝えるか、どんな思いや考えを伝えるか、どのように受け止めるかなど整理することで、より学習に対する意欲や主体性が向上したと考える。

・「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」を提示し、学部全体で共通理　解して取り組んだことで、国語科の授業以外でも話し方や聞き方を意識するようになってきた。また、「かまくらカード」を活用することで伝えたいことを絞ったり、何を友達が伝えようとしているのかを意識しながら聞いたりすることができた。

イ　言語環境の整理

・単元や題材の流れや学習内容、学んだ言葉などを掲示したり、板書の書き方や内容などを整理したりするなど、国語科における言語環境を意識的に整えるようにした。そのことで、学びを振り返ったり、今何を学ぶか明確になったりし、学びの定着につながった。発言や気付きなどを板書し、他者と共有するようにしたり、言葉を視覚化することで自分の思いや考えを再確認、再検討したりすることにも大いに有効であった。生徒の発言や発表内容を整理して板書することの有用性は明確であったため、板書計画を見直したり、丁寧な書字を意識したりすることもできた。

ウ　教材の選択とねらいの明確化

・教材の選択において、教科書を活用することが増えた。学習指導要領を見直し、個々の段階やねらい、学びの積み重ねなどを検討し、教材選びを行った。教科や段階の目標、内容が明確になったことで、指導内容や個々の具体的なねらい、学習内容が明確になった。そのことで、学習内容が曖昧にならず、引き出したい言葉を明らかにして問い掛けるなど、視点を絞って発問することができた。

エ　対話による学び合いやICTの活用

・学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を活用した授業づくりを行う学　習グループが多かった。学びの優先順位から書字に時間が掛かる生徒への工夫として活用したり、学びを共有し、話し合いながら学びを深めたりした。音声入力したり、穴埋めのワークシートを提示したりするなど、ねらい達成のために活用することができた。また、シンキングツールを思考の整理に活用し、板書や掲示物と併用することで不安なく学習に臨むことができ、言葉を視覚化して相手の考えを共有し、自分の考えと比較するきっかけにもつながった。

（２）課題

ア　問い直しやまとめの時間の確保

・提示したワークシートなど様々なツールを活用して自分の思いや考えを伝えようすることができてきたが、より理解を深めたり、より学びの定着を図ったりするためには、「なぜそのように考えたのか」「どの助詞を使ったら自分の考えが伝わるのか」「分かったことを自分の言葉でまとめてみる」など、教師が問い直しをして、生徒のやり取りや考える時間を確保する必要があった。ワークシートを書くことができた、自分の思いや考えを文章にしたということにとどまらず、それを伝え合って分かったに結び付けていくことで、効果的に学びを定着させることができると考える。

イ　国語科の単元または題材計画や教材の選定

・単元または題材の系統性や他教科との関連、教材の適正など計画していく上での迷いや不安があった。指導計画は本当にこれでよかったのか、ねらいや実態に合った教材選択ができていたかなど検証することができなかった。単元構想だけでなく、国語科の年間指導計画についても話合いの場面を設けていきたいと考える。

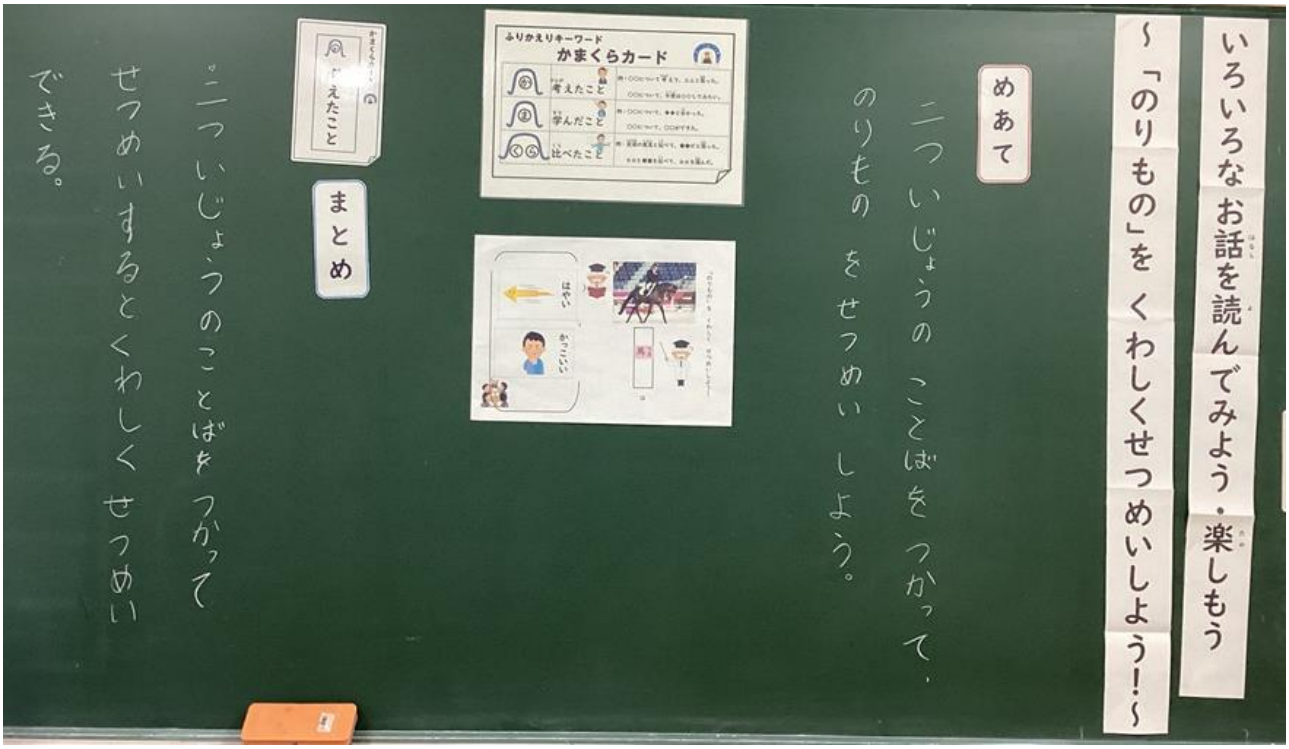
ウ　「かまくらカード」の活用とまとめの工夫

・視点を絞った伝え合いのために「かまくらカード」を活用してきた。学びや　考えを他者と共有するために授業のまとめで用いたり、振り返りの場面で他者の考えと比較するために提示したりした。視点が明確になる利点もあるが、視点に縛られしまい自由な発言の妨げになることもあるのではないかと考える。思いや考えを伝え合うために効果的であったか、十分に検証することができなかったため、活用の仕方や視点等について再検討したい。

エ　学びや伝え合いのさらなる般化と検証

・国語科の授業において、板書や学びの掲示、教師と生徒との適切な言葉のやり取りなど言語環境について意識して取り組んできた。日頃からの生徒とのやり取りや、他の教科や合わせた指導等でも同様に取り組んでいることが増えてきている。普段の生活や他教科等との関連付け、学んだことを深めたり、伝え

合いの場面を広げたりしていくことがさらに必要だと考える。考えをまとめたり、伝えたいことがあったりしても表現することが難しい生徒への対応、より効果的なグループ編制なども課題として挙げられている。グループ編制の再検討や言語以外の表現方法の模索、様々なツールを活用した教師とのやり取りなどに取り組みながら、自分の思いや考えを伝え、受け入れてもらう、受け入れるといった経験を重ねてさらに生活に生かせる学習へと結び付けていきたい。



Ⅲ　高等部の実践

１　生徒の実態

現在、高等部には訪問教育を含め 39 名の生徒が在籍している。

休み時間には学年を越えて興味・関心が高い事柄について生徒同士でやりとりしていることもあるが、それは一部の生徒に限られている。経験したことについて自分の思いや考えをもち、特定の教師や友達には伝えられるが、改まった場面や慣れていない相手へ伝えることが苦手な生徒が多い。また、話している相手の方を向いて話を聞くことや相づちをしながら話を聞くことなどの態度が育っていないため、大事なことを聞き逃したり、やりとりが続かなかったりする場面も多い。

高等部の国語科は、各学年の習熟度、能力別にグループで学習をしている。それぞれのグループで学習指導要領に則って聞くこと・話すこと、書くこと、読むことについての力の育成を目指している。

２　研究の実際

（１）学部研究会の取組

ア　高等部における国語科学習グループ段階の確認

第一回学部研究会では、高等部における国語科の学習グループの段階の確認と高等部の言語環境の整備について話し合った。

学習グループの段階は、特別支援学校幼稚部教育要領総則幼稚部における教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（９）言葉による伝え合いと、特別支援学校小学部・中学部・高等部学習指導要領国語［思考力、判断力、表現力等］段階の目標（２）イを元に確認をした。このことから、各学年において段階を追ってグループ編制ができていることが分かり、次に目指すべき姿が明確になった。（表１）

表１　高等部における国語の学習グループの段階　＜５月＞

幼稚部	小学部			中学部		高等部	
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	１段階	２段階	３段階	１段階	２段階	１段階	２段階
(9)言葉による伝え合い ・先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語りなどに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことなどを伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつようにする。	・言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。	・出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思いついたり考えたりすることができるようにする。	・順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	・筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	・筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	・筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。
		１年３Ｇ□□□□	１年２Ｇ□□□	１年１Ｇ			
		２年１Ｇ□□□□□□□□□□□		２年２Ｇ			
←―	―	３年４Ｇ―→	□□□３年３Ｇ□□□□□□□□□□	・３年２Ｇ□□□	←□□□	３年１Ｇ	―→

高等部職員に言語環境を整えるために、日頃気を付けていることや具体的にどんなことをしているのかの意見を出してもらった。出された意見を整理すると「教師」「掲示物」「機会設定」「ルール作り」「板書」の五つに分けることができた（図１）。この図を高等部の教職員と確認し、意識して生徒と接したり、授業を行ったりした。

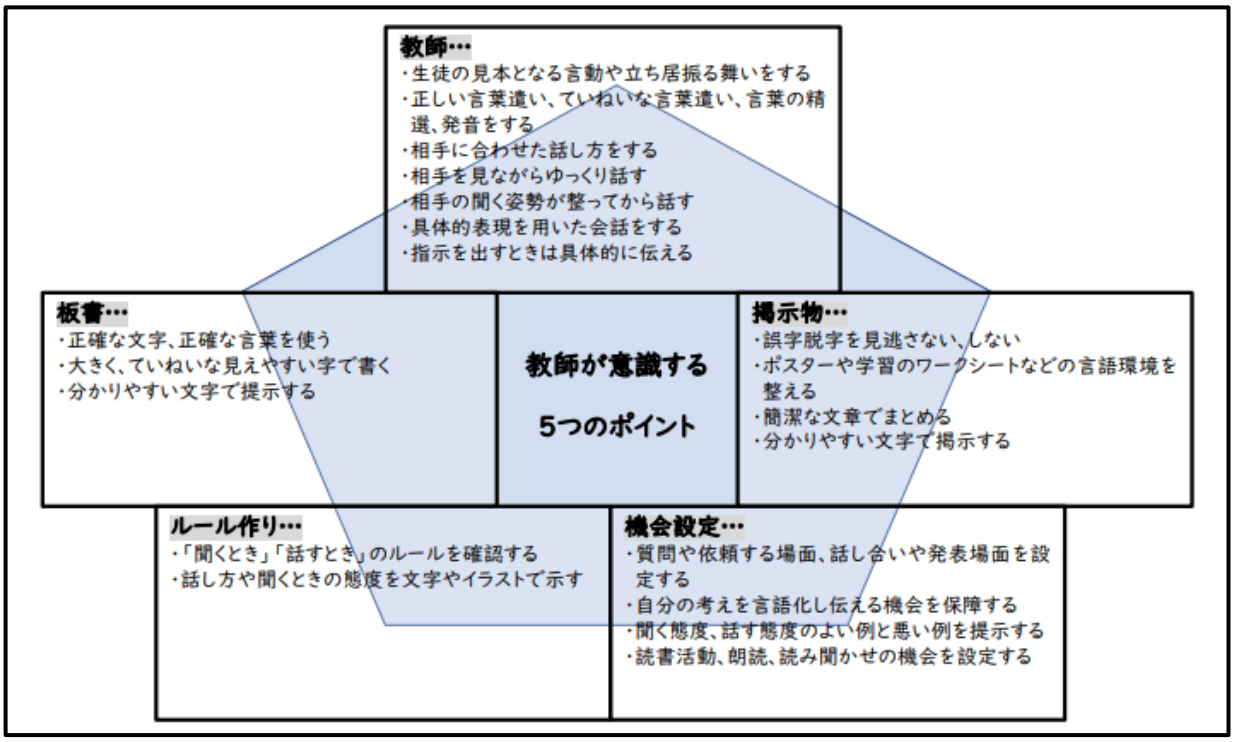


図１　高等部の言語環境の整備のために教師が意識する五つのポイント　＜５月＞

ウ　「聞くとき」「話すとき」のマナー（態度）の提示

第二回学部授業研究会では、図１の「ルール作り」のポイントにある『「聞くとき」「話すとき」のルールを確認する』から学部で統一したものを提示するための話合いをした。

始めは「ルール」としていたが、ルールは「規則」、マナーは「態度」という意味からも、『高等部の「聞くとき」「話すとき」のマナー（態度）』として生徒に提示した。（図２）

エ　授業を見合う期間の設定（学部授業研究会）

高等部の授業づくりとして、学部授業研究会はグループを抽出せずに高等部全職員が国語科の全ての授業を参観するという初めての取組を行った。１か月ほどの期間内に見られるよう調整し、メモを取りながら参観した。その際の授業参観の視点は研究主題や高等部の実態から以下の3点とした。

・生徒が自分の思いや考えをもって、伝えようとしているか（話す姿）
・生徒が相手の話を聞く姿はどうか（聞く姿）
・教師の板書は整っているか（言語環境の整備）

全ての授業参観が終了後、参観した際のメモを参考に「伝え合う姿」を育むにはどうすればよいかを協議した。視点ごとに何をもってよい姿やよかったことを引き出せたかという生徒の具体的な言動や支援の工夫についての意見を出した。

学部授業研究会を経て、全校授業研究会に向けて、授業チェック項目を設定し、授業づくりを考えやすいようにした。（表２）

☆高等部の「聞くとき」「話すとき」のマナー（態度）☆

いつでも、どこでも、誰にでも「伝え合う」基本姿勢を身に付けるために…

聞くとき	話すとき
□話している人に顔と体を向ける	□ゆっくりはっきり聞こえる声で話す
□相手の話を最後まで静かに聞く	□考えをまとめて、挙手をして話す
□相手の話に反応する（返事）	□相手に応じた言葉遣いをする
他にも… □手をとめる（メモはOK） □相手の目を見る □姿勢を正す □相手がどう思っているのか考える	他にも… □単語ではなく、文で話す □相手の名前を呼んでから話す □話しかけて良いタイミングか確認する □相手との距離に気を付ける

図２　高等部の「聞くとき」「話すとき」のマナー（態度）　＜８月＞

表２　高等部の授業チェック項目　＜12 月＞

授業チェック項目（学部授業研究会を参考にして）

(1)環境の設定	
・考える（聞く、話す、書く、読む）ためのヒントがある	
・発表の定型文やポイントがある	
・座席の配置を工夫している	
・ロイロノートの活用や肯定的な言葉掛けなど意見を出しやすくしている	
・見通しをもてる工夫をしている （授業の流れを提示する、同じ流れで繰り返し学習するなど）	
・即時評価をしている	
・考える（聞く、話す、書く、読む）ための時間の確保をしている	

(2)題材の設定	
・生活年齢に即した題材である	
・生徒の興味・関心のもてる題材である	

(3)視覚的支援	
・イラストや写真を活用している	
・手元で拡大できる機器など、見えやすい工夫をしている	
・適切な情報量を提示している	
・生徒の得意（優位）を生かしている	

(4)分かりやすい板書	
・めあてを最初に確認している	
・板書する内容を精選している	
・正確な文字、正確な言葉を使っている	
・大きく、丁寧で見えやすい字で書いている	
・分かりやすい文字（漢字、平仮名など）で提示している	

（２）授業づくりの実際

＜高等部１年生　「くわしく話そう」＞

【単元の目標】

・日常生活で使われる動詞や形容詞を覚え、聞いて理解したり、自分が使う言葉を増やしたりする。
・見聞きしたり体験したりしたことについて、簡単な語句や短い文で書く。
・相手に伝わるように、発音や声の大きさに気を付けて話す。

【研究授業の実際】

□主な活動

・夏休みの思い出の発表をしたり、感想を友達に伝えたりする。
・宿泊学習の思い出を短文にし、友達に発表する。
・友達に発表するときの声の大きさ、スピードに気を付けて話す。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・発表内容が伝わりやすいように、写真と文字をモニターに映した。	・映像と文字があることで、相手の発表した内容がより分かりやすくなり、感想を具体的に話すことができるようになった。
・感想や質問をするときの話し方をホワイトボードに貼った。	・話し方の例があることで、正しい話し方を意識して感想や質問を話すことができた。
・短文を作る学習では、「いつ」「どこで」「何をした」を順番に書くことができるように、ワークシートに一つずつ書く枠を作った。	・ワークシートの枠に沿って、自分の考えを整理して書くことができるようになってきた。
・場面に応じた声の大きさ（声のものさし）の提示や読点、句点が付いたときの間の取り方を数字で表した。（読点は１休む、句点は２休む）	・イラストや数字で表示したことで、声の大きさや休む長さを意識して話すことができるようになってきた。

【成果と課題（成果○、課題●）】

○安心して発表できる環境づくりや自分の考えを整理するワークシートを活用したことで、発表に自信がなかったり、発音が不明瞭だったりする生徒も自信をもって話すことができるようになった。また、相手の話を聞こうとする気持ちも高まった。

●小グループ（生徒２名）での学習では、あまり緊張することなく話したり、相手に注目して話を聞いたりしていたが、集団が大きくなるとできなくなることが多い。集団が大きくなっても自分の伝えたいことを同じように話すことができるように、段階的に学習を進めていくことが必要であると考える。

＜高等部３年生　「いろいろな標識を調べよう」＞

【単元の目標】

・安全や危険、指示を知らせる標識やマークなどが表す意味を考え、判断したり行動したりする。

【研究授業の実際】

□主な活動

・高等部棟内や敷地内にある標識や表示を探し、ICT 機材で記録する。
・各自が校舎内外で見付けた標識や表示の表す意味をインターネットで調べる。
・標識や表示について調べたことをワークシートに整理し、調べたことを発表する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・実生活で見掛ける標識や表示を教材として準備する。 ・実際に標識や表示を探す活動を設定する。 ・ICT 機器を活用して標識や表示を調べることができるようにタブレット型端末を使用する。 ・実習を行った福祉施設や一般事業所にどんな標識やマークがあるかを考える時間を設定する。 ・調べたことを「発表会」で発表する場面を設定する。	・学校の内外にある実際の標識や表示を教材にしたことで、身近にある標識や表示を意欲的に自分から探すことができた。 ・自分で撮影した標識や表示の意味をインターネットで調べ、ワークシートにまとめた。 ・実体験を基に自分が行った実習先や職種で多く使用されている標識や表示について調べる時間を設定したことで、発表に向けて正しい情報を理解しようとしたり、社会で生かそうとする気持ちをもったりしていた。

【成果と課題（成果◯、課題●）】

◯生徒の日常生活の中で身近に見られるいろいろな標識や表示を取り上げたことで、標識や表示されているマークに関心をもち、その意味を調べ、生徒が互いに発表し伝え合うことができた。

◯自分や他者が調べた標識や表示の意味を知り、その意味に適した行動について考えることができた。

●人物の絵に吹き出しを付けて、標識や表示を見て「改札はまっすぐ行けばよい」などと穴埋め文を作成する学習も取り入れていくと、より深い学びにつながり、標識や表示にあった行動につながると感じた。

＜高等部２年生　「群読しよう」＞

【単元検討会の内容】

・群読の面白さを感じ、自分たちで表現することに発展する構成にする。最初に群読表現とはどういうものがあるか知るために、動画で視聴したり、群読の基本的な方法を学習したりする。
・年齢にふさわしく、内容から作者の思いが分かりやすく、自分の感想がもてるような詩を選ぶ。
・自分たちで言い方や役割を考え群読で表現する。その際に、詩を豊かに表現し、相手に伝えるための発音・発声の練習や、表現方法の簡単なスキルを提示し、学習活動に取り入れる。
・この単元での取組の成果を感じられるように、児童生徒の前で発表する機会を設定する。

【単元の目標】

・詩の内容を理解し、発声や発音に気を付け声の大きさを調節して音読する。 知　技
・詩の内容に合わせて表現方法を工夫し、友達と声を合わせて群読する。 思判表
・群読をとおして言葉がもつよさに気付くとともに、思いや考えを伝え合おうとする。 学　人

【単元の概要】

本単元では特別支援学校学習指導要領（中学部）国語科、２段階〔知識、技能〕ア（イ）、〔思考力、判断力、表現力〕Ａ聞くこと話すことエにあたる内容を学ぶ。群読の学習を通し、発音の仕方や適切な声の大きさを調節し、他者を意識して話すこと、また内容の解釈から、情景や場面の様子、語句の意味や事柄の順序を学ぶ。そして、美しい日本語の詩に触れながら作者や自分たちの思いを表現するための群読の仕方を考えて表現することや、言葉のもつリズムと一人ではできない楽しさを味わい、自己表現する力やコミュニケーションの自信につなげる。本単元では発声練習として詩「五十音（作：北原白秋）」、群読練習として詩「かぼちゃつるが（作：原田直友）」、群読表現を考えるために詩「自分のことばで（作：小森香子）」を取り上げた。

【研究授業の実際】

□本時の目標（本時　5/8）

・詩「自分のことばで」の後半部分の群読の仕方を考え、声を合わせて群読する。思判表

□主な活動

・文章を分担して、表現方法を考える。

・意見を出し合って、群読の表現方法を群読譜にまとめる。

・作った群読譜を見て群読する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・生徒が感じた作者の思いが強く表れたと思う部分をキーワードとし、それを強調する方法を考えるための、群読方法のヒントカード（全員、一人、繰り返し等）を黒板に貼る。 ・分担して考えた群読の仕方を書き出せるよう、タブレット型端末を使用した群読譜のワークシートを準備する。 ・各自の考えを共有し意見が出せるよう、大型モニターに映す。 ・イメージを膨らませることができるように、撮影した練習の様子を見る機会を設ける。	・群読方法の「一人（ソロ）」「繰り返し」「全員」の言葉が、生徒たちから出ている。 ・リラックスして授業に参加し、群読でよく声が出ている。話すことを楽しみながら練習している。 ・課題を考え、自分の言葉で伝えている。 ・友達の考えた群読譜を肯定的に受け入れている。 ・一斉に読んだときと、生徒が考えた群読をしたときを動画で見比べることで、違いや考えた群読のよさを振り返っている。

【授業研究会での主な協議内容と改善案】

思いや考えを伝え合うための手立てと生徒の姿について協議し、次のような改善案が出された。

・それぞれが考えた群読方法で一度群読した方が、生徒が意見をもちやすい。

・思いが伝わる表現だったかを生徒がどう考えているか。生徒の考えを引き出し、生徒のイメージにつなげられるように教師がどうよかったのか具体的な言葉での評価があればよい。

・群読の表現方法をもう少し追求すると、群読するときに気持ちが入り、声の強弱が使えたのではないか。

・教師や他の生徒の話を聞くことを意識できるように、発言する際のマナーを確認し全体を考えて授業を進める。

【指導助言（教頭　髙橋　和恵）】

□授業づくり

群読の中に、聞くこと、話すことについてねらいを絞った単元が設定されており、教材も生活年齢に合う内容だった。ICT に関しては黒板とモニターの使い分けやタブレット型端末の活用など、それぞれ効果的に活用されていた。普段の授業のよさが出ていた。教師の指示、説明が最小限だった。

□教師の発問

課題とまとめで生徒から言葉を引き出すときの発問に難しさがあった。課題については、生徒がいかに課題意識をもてるかが大事になる。作者の思いを具体的にイメージできるようになると、生徒の考えも深まってくる。

最後の評価の場面では、動画を見るときのポイントを示すなど、自分たちで適切な評価をし、その評価が次時に生かせるようにしていくとよい。

□学習上のルールやマナー

授業における発言のルールやマナーを徹底できるようになるとよい。教師が話しているときは最後まで静かに聞くことや、教師や他の生徒が話をするときはタブレット型端末を置いて話をする人の方を見る、発言するときは挙手をするということを、学部全体で取り組んでいけるとよい。

【成果と課題（成果◯、課題●）】

◯群読譜の形式を用いることで視覚的に分かりやすく、群読方法を整理しやすかった。

◯詩の内容を読み取り、ヒントカードを使って、作者の思いを表現するための群読方法を考えた。自分たちが伝えたいと思った言葉をどう表現するか、お互いの意見を取り入れて考えることができた。

◯人前での発表に最初は難色を示していたが、群読譜ができあがると自信につながり、全校集会での発表を堂々と行うことができた。

●タブレット型端末を使用して学習を進めたが、紙のワークシートを活用するなど、生徒たちの手元に学習の過程を残す方法があるとよかった。

●今回は生徒たちが文章を分担し、キーワードを強調するための方法をそれぞれが考えて、つなぎ合わせて群読譜をまとめた。詩全体の構成理解につながるように学習を深められると、全体をとおしての群読構成を考えることにつながったと考える。

●群読発表の様子の動画を見て自分たちで振り返ったが、励みや達成感につなげるために、群読を見た人から感想をもらう機会を設定できればよかった。

３　研究のまとめ

（１）成果

ア　言語環境の整備

（図１）のように、言語環境の整備について教師間で共通理解したことにより、教師自身の言動の見直し、分かりやすい板書、ルールやマナーの定着へとつながった。特に、分かりやすい板書とは、本時の学習の流れが分かるように「単元（題材）名」「めあて」「本時の活動」「振り返り（まとめ）」を示したり、考えたり話したりするときのポイントが見て分かるようにしたりすることを確認した。

以上のことに気を付けながら授業づくりをすることで、生徒が考えたり自分なりの表現をしたりすることにつながった。

イ　「聞くとき」「話すとき」のマナーの向上

（図２）を各教室や廊下に掲示することで、教師も生徒も授業中だけでなく普段から意識して話を聞いたり、話したりするようになってきた。生徒が挙手をして指名されてから話そうとしたり、話している人を見て聞こうとしたりする姿が見られるようになった。

ウ　学部授業研究の方法の工夫

１つの授業に絞らずに国語科の全授業を参観したことで、効果的だと思う指導方法を参考にしたり、共有したりすることができた。伝え合う力を育てていくためには、人との関わりの中で様々な経験や気持ちが動く実感がベースにあることも分かった。参観を通じて、お互いの板書や教材の工夫、ICT の活用の仕方を参考にすることで、生徒の伝え合う姿を高める授業づくりができた。

（２）課題

ア　「聞くとき」「話すとき」のマナーの定着

学部統一のマナーを提示することで、同じ方向性で指導するようになったが、マナーが身に付いたとは言い切れない生徒もいることから、今後も継続して指導していく必要がある。また、「話す」ことで自分の思いを伝えることが苦手な生徒に対して他の手段を見出し、思いや考えの伝え方についての多様な方法、効果的な方法を見付けることが課題として挙げられる。

イ　他教科や実生活との結びつき

国語科で身に付けた力を他の教科や各教科等を合わせた指導、校外や家庭などの様々な場面で発揮できるように、場面を捉えて言語活動の充実を図っていく必要がある。それらの経験が繰り返されることで、学びの定着や伝えたい気持ちにつながっていくと考えられる。高等部

卒業後は社会に出て行くことも視野に入れ、社会を見据えた聞く力、話す力を伸ばしていけるようにしたい。

ウ　学部授業研究の方法の工夫

今回の学部授業研究会の参観方法では、一つの授業をじっくりと見ることができなかったという反省点が挙げられた。授業の「導入」「展開」「終末」という流れを意識した授業研究会を設定することで、授業内での生徒の変容や効果的な教材の工夫などを協議することができる。また、数値化できるような検証もできるのではないかと考える。次年度に向けて、より効果的な授業研究会の方法を工夫したい。

令和6年度 研究紀要「第 45 集」発刊

あとがき

教頭　髙橋　和恵

「自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～国語科の授業設計と授業実践を通して～」という研究主題を設定し、１年目の成果と課題を得た。

小学部では目指す伝え合う姿を「教師や友達の話を関心をもって聞き、思いや考えを表現する姿」とし、主に聞くこと、話すことについて共通のルールを設けて授業実践を重ねた。児童が話を聞く体勢を整えること、教師が児童同士のやりとりをつなぐ役割を担うことに留意したことで、児童の聞く・話す力が高まった。さらに、教師が発する言葉や板書も言語環境の要因であると認識し、言語環境を整える工夫を行った。

中学部では「自分の思いや考えを相手に伝わるように表現し、相手の思いを受け入れながら聞く姿」を目指す伝え合う姿とした。相手に伝えるための表現の方法として話すこと、書くことにポイントをおき、相手の話を聞くときは肯定的に捉えリアクションを示すことで伝え合う姿を目指した。ワークシート等に書く学習の充実を図り生徒の気付きを板書したことにより、生徒の言葉を視覚化し考えを整理する学習を深めることができた。また、話合い活動を取り入れることで、他者の意見を聞き自分の考えを深める姿を導き出すことができた。

高等部では目指す姿を明確にした学習グループの編制をしているが、聞くときと話すときのマナーを学部で統一し、話す姿、聞く姿、言語環境の整備の三点にポイントをおいて授業実践・改善を進めた。国語の全学習グループの授業を高等部の全職員が参観したことで、それぞれの学習グループの効果的な指導方法を学部全体で共有し、他の授業実践に生かすことができた。また、伝え合う力を育てていく上で、人との関わりから得る経験や様々な感情等がベースとなり得ることを学部職員で共通理解できたことも成果の一つである。

以上のように各学部の発達段階、生活年齢に応じて研究の成果が得られた一方で、課題もあげられている。それぞれの学部で出された課題は、文章表記上の文言の違いはあるが、国語の授業で身に付けた力を他の教科等の授業や学校生活、家庭や地域社会など様々な場面で生かせるよう学びの定着を図っていくこと、という点において共通している。

伝え合う力を高めるということは、人と人との関係性の中で言語を通して理解したり表現したりする力を高めることである。次年度は、聞いたり話したり書いたり読んだりする具体的な言語活動を通して、相手や目的、意図、場面や状況などに応じて児童生徒一人一人の伝え合う力が高まるよう、授業改善を推進していく。多様な場面や状況における学習の積み重ねを大事にし、国語科の学習を他教科等の学習や学校の教育活動全体と関連させ、学部の枠を超えて学校全体として教育課程の編成や生徒を取り巻く言語環境の整備に取り組んでいきたい。

最後に、本紀要を御高覧いただいた皆様より、忌憚のない御意見、御指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

研究に携わった職員（令和６年度）

校　長　清　水　　潤　　教　頭　髙　橋　和　恵　　教　頭　稲　川　一　男

事務長　川　本　健太郎　　教育専門監　菅　原　咲希子

(小学部)
熊　谷　淳　晴
高　山　知　子
川　崎　亜希子
若　生　友　樹
大　川　里香子（研究部）
佐々木　麗　子
水　谷　智　子
鶴　田　美　穂
内　藤　稚　子
戸　澤　寛　子
柴　田　怜　子
藤　平　裕　太
髙　橋　由　衣
髙　槝　佳奈子
小　山　耕　大
佐　藤　玲　奈
古　関　利加子
進　藤　由　衣
室　井　真　美（研究部）
佐々木　基　子（研究部）
鈴　木　圭　太
古　屋　智佳子
菅　原　由紀子（研究部）
菅　原　美奈子
安　達　由美子

(中学部)
堅　持　夕　子
宮　本　ゆかり
伊　藤　由　紀
小　番　俊　和
土　田　優　子
佐　藤　　豪
佐々木　涼　子
後　藤　ゆり子（研究部）
岩　井　宏　樹
柴　田　秀　幸
高　井　哉　子
髙　橋　典　子
本　間　美　紀
小　椋　トモ子
深　川　靖　子
髙　橋　成　浩

(高等部)
柴　田　　豪
佐　藤　　恵
鎌　田　裕　之
朝　倉　知　司
佐　藤　尚　人
木　村　栄　一
谷　藤　弘　美
小　西　ゆり子
池　部　和　美
高　橋　静　香（研究主任）
小棚木　明　子
菊　池　牧　子
佐々木　　祐
遠　藤　奈津子
岩　澤　有希子（研究部）
佐々木　詠　吏
伊　藤　歩　佳
高　橋　　誠
沓　澤　直　樹
富　樫　　潤
三　浦　真紀子
赤　坂　千　春（研究部）
鈴　木　里　美
大　沼　美和子
松　井　克　彦
和　賀　典　子
沖　田　　勇

発行年月日　：令和７年３月 21 日
発　行　所　：秋田県立横手支援学校
〒013-0064　横手市赤坂字仁坂 105 番地１
Ｔ　Ｅ　Ｌ　：　0182-33-4166（小・中学部）0182-33-4167（高等部）
Ｆ　Ａ　Ｘ　：　0182-33-4266（小・中学部）0182-33-4277（高等部）
Ｅｍａｉｌ　：　yokote-s@akita-pref.ed.jp
ホームページ：　http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp